
夏目漱石の憂鬱

北極猿

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

夏目漱石の憂鬱

【Nコード】

N7550B

【作者名】

北極猿

【あらすじ】

本棚から忽然と現れた夏目漱石の「こころ」、左手のない老人から贈られた奇妙な遺品、類稀なる才覚を持つ幼なじみの苦悩、長野に住む叔父、長いあいだ秘められた恋……夏の持つ魔力が東大生の「僕」を少しずつ狂わしていく。

第一章 「夏、レポート、デ・キリコ」(前書き)

この小説は「ねじまき鳥クロニクル」のオマージュとして過去に書かれたものです。そのため一部引用がありますが、物語の関連性はほとんどありません。

再投稿の発案元は文学ジャンルを盛り上げようという企画趣旨によるものです。

第一章 「夏、レポート、デ・キリコ」

気の早いヒグラシがしつこく鳴いていた。夏の正午だった。

僕は学校に向かうための準備をはじめ、キャンパスノートと筆箱をいちどは鞆の中に入れたのだが、思いなおして棚をあさり、高校時代の社会科ノートを取り出した。今日中に満州を巡る第二次世界大戦中のロシアと日本の関係をレポートで提出しなければならなかったのだ。ノートはひどく埃にまみれていた。僕はそれをゴミ箱の前に屈んではたき、改めて鞆の中にしまった。

だが玄関までいったところで何かにふと気がついた。部屋を出ようと半分振り返ったとき、何かが瞼の裏に焼きついていていた。ちょうどその残像が消えかけるときにふと僕の意識がそれを掴んだのだ。そいつは僕の脳みそを蹴飛ばし、呼びかけていた。おい、起きろ、俺はここにいてずっとお前を待ってるんだぞ。僕はそれから十秒間くらい部屋の虚空を眺めて佇んでいた。過去と現実の焦点を合わせるのにひどく時間がかかってしまったのだ。おかげで傍から見るとまるで今しがた夢から覚めた人のように見えたことだろう。

思い当たったところで鞆を肩から下ろして玄関に置き、ふたたび僕は部屋に戻った。そのあとで糸で手繰られるがごとく棚に歩み寄ると、視線の先に並んでいたのは夏目漱石の「こころ」だった。僕はそれを自分の部屋の本棚の中で見つけたことに少しのあいだ戸惑った。どうして漱石の「こころ」が僕のアパートの本棚にあるのかわからなかった。しかし呆然と立ち尽くしてそれを見ると、草原をたなびく夏風のように色んなものがまざまざと脳裏に蘇ってきた。頭の周りでぐるぐると飛んでいた目に見えない小さな羽虫を随分かかって捕まえたような気分だった。僕はずっと昔、まだ子供のころにこの本を借りたのだ。

僕は本を手にとり、それをしばらくじっと眺めたあとで埃を払って鞆の中にしまった。

外に出てアパートの階段を降りていると、ヒグラシの声はぐつと現実味を帯びて僕に近づいてきた。夏らしい夏の日だった。僕は梓に電話をかけ、今から行くと伝えた。

「ほんとに遅い」と彼女は苛立たしげに言った。「結局レポートは提出できるの？」

「大丈夫だよ」と僕は笑った。場に合わないぎこちなさのせいで、我ながらひどく調子はずれな笑い方になってしまった。「高校時代にたまたま同じ題で書いたレポートがあつたから」

「それを提出する気なの？」

「うん」と咳き込みながら僕は言った。「だってそれしかない」

「大丈夫？ 高校つてもう何年も前のことでしょ」

「平気だよ。下手したらあの頃の方が今よりずっと勉強してたんだから」

それは本当に本当のことだった。何年か前に比べれば、今の僕はずっと楽な生き方をしている。

「うんまあわかった。じゃあとりあえず急いで」

僕はそれから東急田園都市線に乗り、緑一色に染まった街並みを電車の窓からしばらく眺めていた。夏鳥が走り出した電車と同じ速度で連れ立って飛び、僕が目を離れた拍子にどこかへ向きを転じてしまった。途中に通る過ぎた踏み切りでは赤い風船を持った親子連れが何かを熱心に話し、また次の踏み切りではサッカーボールを脇に抱えた少年が自身の着ているＴシャツの襟を掴んでぱたと胸元に風を送り込んでいた。そんな風景を目にすることで、僕にもようやく夏の到来を身を感じる事ができた。僕は季節を体に馴染ませるのに時間のかかる方なのだ。しかしそれは僕だけではないだろうとも思う。三軒茶屋に着いたころだが、額に汗にじませた人々がホームからぞろぞろと乗り込んでくる際に、何人もの憂鬱なため息を同時に耳にしたからだ。

渋谷に着いたのは十二時四十五分ごろだった。僕は京王井の頭線に乗り換え、さっきと同じように周囲の観察を続けていた。窮屈な車両に座した人々は、視界に霞がかかっているみたいみんな一様に目を細め、波打つ電線を心電図の波形よろしく眺めたり、正面に座る女の子の脚に一瞥を配したりしていた。特に普段と変わりはないが、夏だけはその情景に何かしら心を強く惹きつける、ある種の興奮を孕んでいるように思う。あるいはその含みに対して我々は興奮を覚えるのかもしれないが。ともかくも夏は不思議な魔力を持っているんだろう、と僕は思った。例えばデ・キリコの絵が示すように。

けれど実際のところ元気にはしゃぎ回っているのは夏休みという一時的樂園を迎えた子供たちだけだった。憧憬とやらを年々失いかけつつある大人にとっては、暑さなんてものは人をかりかりさせるだけの厄介なものにしかない。分別を失わせ、知を枯渇させ、場合によってはだが心底人生にうんざりさせられる、ということにもなりかねない。——誰かをげんなりさせたいわけではなく、ただそついう季節でもあるということだ。

第一章 「東大と学生の群れ、医学とコカ・コーラ」

駒場東大前で降りたとき、日差しはピークに達していた。角砂糖の山に似た都心部が煌々と溶け出し、人々を重く甘ったるい海に沈めていた。なにもかもの陰影がはつきりとしすぎているせいで、空を見上げると目がちかちかするほどだった。ホームはほとんど学生で埋まっている。彼らは僕も含め特徴のない人間ばかりだった。少なくともたった今世界紀行を終え、満たされぬ知的好奇心に従って万物を極めようという意志と決意のありそうな人間はいなかった。もっととはつきり言えば、とてもこの中に何か突出した能力を持つ人間がいるとは思えない、ということだった。この世の五割の人間は見た目で判断できるものだと思うが、こればかりは例外だろうと思う。彼らはなにせフアンタスティックなことから。他の誰がなんと言おうと。

大学の敷地はおそろしく広く、そしてどこも人で溢れ返っていた。見た顔は何人かいたが、まともに話したことのある人間は見当たらなかった。僕は農学部の前門をくぐって右に折れ、キャンパスをぐるりと半周まわって医学部の付属病院に入った。中はうだるような暑さの外気に比べると、一瞬身が凍りついてしまうんじゃないかというくらい冷房が効いていた。実際、入ってきた何人かは自身の肩を両手で抱くようにさすった。梓は病院の大きな受付の端に寄りかかって腕を組み、白衣に身を包んでちょうど何かに目を引かれて後ろを振り向いているところだった。

歩いていって僕が声をかけると、彼女はぎょっとして僕を見つめた。それからすぐに責めるような、たった今なのか散々たる失敗を目にしたかのように額に手をあて「もう」と悩ましげな言葉を宙に放った。

「ごめん」と僕は言った。でもそれは却って彼女を勢いづかせたかたちになってしまった。

「ごめんじゃなくて」と有無を言わさぬ口調で梓は言った。「どれだけ待ったと思うの。ほんとに遅い。一体何やってたの？ 電話は全然繋がらないし」

「電車の中だったから電源を切ってた」と正直に僕は白状した。

「でもあのあとすぐに出たんだよ。あの電話のあとすぐに」

「どこに住んでるっけ。神奈川？」

そうだ、と僕は言った。

彼女はため息をついて僕の腕を取った。

「始まつてるから急ごう。もう説教はあと」

「ごめん」と僕はもういちど言った。

これは世の中の誰にでも言えることだとは思っけれど、僕は病院という場所があまり好きではない。辺りには薬品と消毒液を渾然一体としたような匂いが立ちこめ、すれ違う人々はみな目に見えない病そのもののような労苦を背負い、頭をいくぶん垂れたままとぼとぼと歩いている。そして個人的にも病院にはひとつトラウマがあった。僕はもともと麻酔の効きにくい体質で、小学生のころに大怪我（とりたてて平和な僕の人生の中ではそれは大怪我に属した）をした時分、何本も麻酔注射を打たれた挙句に結局は地獄のような痛みを感じながら、そして鋼鉄が皮膚を貫く身震いするような感触を味わいながら足の指先を縫ったという過去がある。それに医学の勉強はおよそ僕向きではない。このジャンルに関して言えばということだが、紅茶を一杯入れるのに二時間かかる神経症患者の方が少なくとも僕よりはまともな働きをすることだろう。

僕にはあらゆる点で欠陥が多すぎた。何事も自分のペースでやらなければ、それも勝手知ったる環境でなければ十分な力を発揮することができないのだ。ひとたび緊張状態に置かれるなり、全ての歯車があべこべに動いて軋みを立て、ほとんどパニックに近い状態にまで追い込まれる。飽和状態というのがそれに近いんじゃないかと思う。あまりの忙しさに今自分が何をやっているのかわからなく

なったり、するべきことが多すぎて何から何まで手につかなくなつた覚えのある人間には僕のこの気持ちがよくわかるはずだ。とにかく僕はこの馬鹿げたシステムに自分を投機したことで、却つて自らに信用を置けなくなり、どこにいてもまず時間を確認するという弱気な癖がついてしまった。それに誰か他人の命をあずかるような身分になれば、僕の能力はもつと制限されたものになつてしまつたろう。医学の授業で今のところためになつたのは、ヘロインがもともと咳止め薬として販売されていたことと、コカ・コーラに実際にコカ葉のエキスが入っていたことくらいだった。

「何時から始まつてるの？」と廊下を歩きながら僕は梓に訊いてみた。

「十二時半」と機械的に彼女は答える。それから急に母親みたいな口調になつた。「ねえ、おととい配られたでしょう、通知の紙が見てないの？ それに昨日もそのことでメール送つたし」

「返してないや」

「そう、返されてません。——ねえどうしてそんなにいつもすぐ何かを忘れちゃうの？」

僕は何も答えられなかつた。ごめんという言葉を口にしかけて、その言葉の奥行きのなさに辟易してしまつたのだ。

「ちゃんとしてよね」と彼女は僕を見上げ、それから何か古い出来事を思い出すような、かげりのある笑みを浮かべた。「ここは気楽な学校じゃないんだから」

「ここ病院だよ？」

「違う」と彼女はきつぱり言った。「ここは東大の医学部付属病院。東京大学のね」そのあとで早口でこう付け加える。「頭のいい人間ばかりなんだから」

第一章 「教養についての考察、ガン患者の未来予想」

彼女は腕時計で時間を確認すると、僕の手を取ってまたいつそうせかせかと廊下を歩き出した。病院はコツコツという数十人の靴音と誰かを呼ぶアナウンスの声で破裂しそうになっていた。そのせいか目をつぶると夕立の中を走る街宣車がふと浮かび上がってきた。

「でも頭がいいからって優秀とは限らない」

静かになったある瞬間、僕はぽつりとそうつぶやいた。傍を通りかかった男がなにかの勘違いを起こしたらしく、いったん足を止め、僕の顔をまじまじ見てからまた歩き出した。

「馬鹿ね」と彼女は僕の顔も見ずに言った。その声があまりにも確信に満ち、その問いのために用意されたようなものだったので、彼女もこのとき自身の言った言葉について考えていたんだろうと察した。

「どうして」

彼女はふいに立ち止まり、くると僕の方に体を向けて指を一本立て、僕のお腹に向かって喋った。

「いい？ そんなことは関係ないの。少なくともここで——」そこで彼女は僕の顔をいちど確認した。そのあとでつばきを飲み込み、続ける。「学校で求められるのは人として優秀か、よりも、どこまで自分が優秀な人間かを大勢の前でアピールすることで優劣が決まるの。わかった？」

彼女は言い切るとまた僕の腕をぐつとひっぱり、ほとんど坂道を行くような感じでせかせかと廊下を歩いた。

「そうかもしれないけど」と僕はひとりごつのように言った。

「いいからもう急いで」と彼女は言った。

病室に入ったとき、デザインという概念を逸脱した部屋の壁掛け時計は一時十五分を差していた。立花先生という老医師は僕たちを

叱らなかつた。というより、生徒が遅刻したことに対してとりたてて責める意識がないように見えた。僕らがこそと輪に加わるとき、何人かの医学部生徒が我々に一瞥を配したが、ありがたいことに彼らの興味を獲得するに至らなかつたらしく、すぐにその無機質な群れに違和感なく交わることができた。それから立花先生の回診に我々はついてまわり、逐一レポート用紙に順序を書き記した。容態を訊く、脈を計る、回復の希望的観測を伝える。梓はときどき僕のレポート用紙を覗き込み、小声で（ただしその調子は激したり呆れたりした）アドバイスを与えた。それでいつの間にか全て彼女の指示に従って用紙を埋めることになってしまった。彼女の好意について感謝しながら僕はうんざりする気持ちを抑えきれなかつた。やれやれだ、とそのとき僕は思った。たかがレポートの書き記し方ひとつにだって理想的体系とやらが存在するのだ。

病室はどこも思ったより和やかだつた。それぞれ読書をしたり、トランプをしたり、お隣同士で世間話をしたり――それぞれがそれぞれの暇つぶしを用いて、病院での無意義な今日をやり切ろうとしているわけだつた。部屋の窓際には花瓶が置かれ、どれも縁起をかついで根のないものばかりである。ちょうど回診の途中にひと家族が夫人の見舞いに訪れ、途端に室内ががやがやと騒がしくなつた。僕は彼らを見つめながら、こうして我々に観察されるのは患者たちにとつていったいどういう気分なんだろうと思つた。そして情のうつた患者にこれ以上ないほどの慈愛を注ぐ立花老医師含む看護婦を見て、僕は自分が感じたものの薄っぺらさに愕然とし、しばし両の唇を離れたまま口を聞けなかつた。僕にはそこまでの奉仕の精神とやら、一口に言えば他人への愛がとても足りなかつた。つまるところ、僕が学んでいると自負している医学とやらはちっぽけな専門語の羅列でしかなかつたわけだ。

「見て」と梓は僕の耳元に口を寄せ、早口に囁いた。「あのところどころハゲが目立つ人」

でも僕はまだそのとき、言わば十五歳に立ち返って人生の意味について考えていた。弓なりの道を通してその魅力的なアクセントが僕の耳に届いたとき、ようやく彼女の挙げた人物が目に入った。その人物は病室の隅に置かれたベッドの上で静かに横たわり、立花先生が歩み寄ると片手を挙げて力なく笑った。

「あの人ガンだ」となにか決定的な秘密を打ち明けるように梓は言った。「ほら、点滴が紫色」

「抗ガン剤か」

「あら、よく知ってる」と彼女は僕の顔を見る。

「まあそれぐらいはなんとか」と僕は言った。それからまた患者の方を向いた。「でも意外と元気そうだよ」

「告知されてないんじゃないの」と眉をしかめて梓は言った。「知らない方がいいってことも人にはやっぱりあるから」

僕はガン患者の痩せこけた頬を見ながら、彼の五年後について漠然と考えた。梓の言うとおり、世の中には知らない方がいいこともあるのだろう。大人になるまでの過程で誰もがそれを一度は身を感じ、決して忘れまいとするはずだった。でも僕にそのとき浮かんできたのは、魂を失った彼の肉体が何人もの抜け殻と共に一列に並べられ、地獄のような業火でいちどきに身を焼かれながら、最後は長い鉄製の火箸でウエハースのくずのようになった喉仏を、縁もゆかりもない葬儀屋の手で古代の石器よろしく宙に翳されている場面だった。もちろん骨はゆくゆく海底の砂粒と化すわけだが。

第一章 「梓の結婚における願望、ナンとカレー」

回診が終わると僕らは解放され、立花先生は「午後六時にもういちど回診をするから来たい人はおいで」と言った。もちろん行くつもりはなかった。僕と梓はそのあと学校を出て遅い昼食を取ることと合意し、「西門から出てまっすぐいったところにおいしいカレー屋さんがあるからそこにしない？」という彼女の誘いに乗って、我々は一路カレー屋へと向かうことになった。

彼女は店に入るとナンとカレーを頼み、僕は普通のカレーライスを頼んだ。

「わたし立花先生好きなんだ」

梓によるインド人が経営するこの本格的なカレー屋についての講義うんぬんがあつたあとで、テーブルに頬杖をつき、彼女が好ましい人物を話題に挙げるとき往々にしてそうであるように、爛々とした目で嬉しそうに言った。

「どうして」

「穏やかだし、親切だから。医者つていつもきりきり思いつめた顔をしてるイメージだけど——ほら外科の山内先生とか——だけど立花先生はいつもニコニコしてるでしょ？ 患者さんにも優しいし、だから女の子の中でも人気あるの。なんかかわいいって」

「かわいい？」と僕は眉をしかめた。かわいいという言葉は立花先生にとても不似合いであるように思えたからだ。なにより彼をそんな風に捉えてしまうのは人生の大先輩としていささか気が咎めた。「そう」と彼女は肯き、それから顎を三日月の角度に保ったままあたかも夢心地で続けた。「わたしも結婚するなら立花先生みたいな人がいいなあ。いい歳の取り方をする人」

「そんなの今はわからないよ」と僕は笑った。

「そう？ でもわたし晩婚にしようかと思って」

「本当に？ 晩婚つていうといくつくらい」

「五十とか、六十とか」

僕は啞然として、少なくともそれから五秒間くらい黙ってしまった。視線の脇では腰に手をあてたインド人がじっと窯の中のナンを覗き込んでいた。

「どうして？ いけない？」

「いや、いけないはないけど……」僕は困惑していた。彼女が老いることすら僕には信じがたい事実だったからだ。「子供はどうするの、いらないの？」

梓はそれについてしばらく「うーん」と考えていた。やがてテーブルに置かれたコップの水を飲み干し、彼女はきつぱりと首を振った。

「いなくてもいい」

「……へえ。そうなんだ」

それからちやうどロシアの国土ほどはあろうかというナンがテーブルに差し出された。もしも僕に文化の違いというものを理解しようとする頭がなかったら、正直な話、僕はこの扁平な物体を靴の底に使用しただろうと思う。なんと言っても生地が皿をはみ出しているのだから！

梓は驚いてほとんど狼狽している僕を見ながら、「びつくりしたでしょ」と嬉しそうに言った。

僕がナンを実物として見るのはそれが初めてだった。食べ方すらよくわからなかった。

「それ、全部食べきれの？」と僕は心配になって訊いてみた。

「食べる？」と彼女はナンを一切れちぎって僕の方へ向けた。

「いらない、と僕は言った。」

そのあとで梓は中野方面に用事があるからと言って僕と別れ、僕は自身は特に何の用事も持ち合わせていないのキャンパスに戻り、木陰のベンチに座ってぼんやりと谷崎潤一郎の「痴人の愛」を読み進めていた。しかし本の内容はほとんど頭に入ってこなかった。陽を

浴びるうち段々と僕の意識は大気圏を超え、気づくと半端な高さに建てられたバベルの塔にふらふらと立って意思の通じ合わない人々を見下ろすような格好になっていた。陽が影からはみ出た左腕の表面をじりじりと焼く感触を除けば、僕はほとんど朦朧としていた。やがて本を閉じ、木の葉から漏れる煌きを見上げることに潜在的な心地よさのようなものを覚え、しばらくのあいだずっと同じように首をもたげたまま、うまく働かない頭をなんとかしようと試みてみた。けれど部屋の散々な状況によりやく思い当たると、段々家に帰ることすら億劫に感じてきた。この現代にありながら、僕の部屋には未だクーラーもなければ扇風機すらもないのだ。

それから去年の夏について思い起こしてみた。目をつむり、真っ赤に染まった瞼の裏に十二ヶ月前の出来事を、あるいは瞬間的な情景を片端から思い浮かべてみる。だが意識を留めおこうとすると、それは真夏の暑さによってぐにやりと溶解され、フライパンの上のバターが如く、気がつくとはほとんど原型を成さないまでになってしまう。かろうじて確かな思い出と呼べそうなのは、八月の終わりに長野の高原に住む叔父の家に避暑の名目で足を運んだことくらいだった。でも歯がゆいことに、結局のところ向こうで何をしたのかについてはうまく思い出せなかった。たった一年前の出来事が、もやのかかった大きな川の対岸で僕に足首だけを覗かせている。

僕はそのベンチで三十分くらい時間をつぶし、それからぼつとして大学の校内に入った。馬鹿げたことに、僕は肝心なレポートの提出を今の今まですっかりと忘れていたのだ。この忌々しい古びたノートを手渡さなければ、僕はそもそも何をしにきたのかがわからなくなる。立花先生は待ってくれても、他の教授たちは僕のような比較的凡庸な生徒に寛大なる情けをかけてくれたりはしないのだ。

だが方々に足を運んだ拳句、歴史部の専任教員がすでに校内を後にしたことを知り、僕は今日何度目かの自己嫌悪に打ちのめされることになってしまった。仕方がないので誰か適当な先生にノートを

手渡し、少なくとも今日中に提出しようとする意志はあったんだということを伝えてもらおうと思った。だがそれはどの先生にも断られた。

「駄目。駄目だよ」と彼らは邪険に手を払った。その答えが一樣に何かの取り決めを思わせたから、僕としてもなんだか怯んだ格好になってしまった。「ちゃんと専任の先生に渡しなさい。それは君の持つべき責任なんだから」

それで校内を出て煮えたぎるキャンパスに戻ったとき、僕は自分がどこにも行けやしないんだということを思い知ることとなった。どこにも、だ。

そのまま校内かキャンパスのどこかで待ってしようかという考えがちらついたが、馬鹿馬鹿しさとやりきれなさを感じ、地面にめんどろの自身の唾の跡を残すに留まった。それにもう受け取つてくれない可能性だってあった。タイムリミットは今日の午後二時までだったのだ。太陽は家を出るときに比べて三十度くらい傾き始めている。どうしてこういつも俺は失敗ばかりなんだろう、と僕は思った。二つを同時に抱え込むことがどうしてもできないのだ。たとえば抱え込めたとしても、いくらもしないうちに一方を無意識の闇に放り込んでしまっている。

自分の失敗をうまく受け入れられないことから内心へどもどし、キャンパスのあちこちをうろつろつとしていたのだが、最後は校内を出てやけっぱちに煙草を買い、少し離れたところでそれを吸った。マルボロのメンソール・ライト。わかりきっていたことだけれど、それは軽いめまいを引き起こした。脳みそに直接煙を吸い込んでいるみたいだった。僕は半分だけそれを吸って排水溝に投げ捨て、陽炎の立ち昇る中を駈に向かってまっすぐに歩いた。途中見るからに人目を引く、毛の長い子牛ほどはあろうかというサイズの犬を連れた老人を見かけた。育ちの良さそうな子供が、道端で電柱を指差しながら蝉に小便をひっかけられたとかなんとか母親にわめいていた。

夏の日差しの中では、都会の喧騒がフィルター越しにくぐもって聴こえた。

第二章 「死んでこそ、浮かぶ瀬もあれ、ノモンハン」

満州戦争のレポートは何かの記述を参考にしたものではない。だから本当は正しくない部分があるかもしれない（あるいは間違っていることこそが正しいという場合もあるにせよ）。

その話を本田さんという老人から聞かされたのは僕が高校二年生のころだ。確証のようなものはないが、今とほとんど同じような時期だったはずである。夏休みの課題として生徒たちは日本史の教師から「戦争」という漠然としたテーマを与えられ、それぞれが四苦八苦しながら新学期の始まりにはほとんど全員がそれなりのものを提出したのだが、僕は——これは決して自慢ではないのだけれど——その中で一番高い点数を与えられた。ありていに言えば厳肅なる審査の結果、「高等学校で学ぶ日本史を超越したとても興味深いもの」ということだった。そして僕はそのあとで本田さんの家に行き、その顛末を報告した。彼の耳が悪いために僕が事を全部伝えるころにはすでに心身共々疲弊しきってしまっていたわけだが、本田さんはうんうんと低いしわがれた声で肯き、——しかし結局のところ僕が何について喋っているのかよくわからなかったのだろうとは思っけれど——「あんたは優秀だからな」と言った。

僕は本田さんが好きだった。それはきつと梓が立花先生に対して感じる好意と似たようなものだったのではないかと思う。人の良い、そしてある程度害のない老人は誰でも好きになるものなのだ。

しかし本田さんについて僕が何かを知っているかと訊かれれば、僕はまったく彼を知らないと言ってもよかった。僕は叔父から經由して本田さんを紹介されただけだった。彼は今ではもう数少ない戦争体験者のひとりで、左手から手首をぶつんと失っていた。

「ノモンハンでソビエト軍の戦車に押し潰された」と本田さんはかつて語った。

負傷のあとは内地に送還されたが妻も子も他の家庭に入っており、

施設育ちの彼は事実上天涯孤独の身となった。僕が知っているのはそれだけだ。そんな人が叔父とどうして知り合いになれたのかもまるでわからない。

天涯孤独の身であるとして、生活はごく控えめに言っても質素なものだった。それはまだ歳若く世間知らずの僕には世捨て人のように見えた。部屋の畳はぼろ雑巾のように擦り切れ、窓ガラスはどれもこれも茶色ばんだセロハンテープのようなもので補強されていた。本田さんはいつも寝巻きとも作業着ともとれる薄い青の上下を着ていて、それらが近い過去に洗濯された痕跡はほとんど見受けられなかった。身体の不自由な彼の元には毎日ホームヘルパーが来て食事を作り掃除をしていたのだが、それでも部屋は中流階級の家庭に育った僕には煤けて見えた。そして何より、部屋には息の詰まるような耐え難い臭いが充満し切っていた。

「水が悪いのはいかな」

初めて僕がその場所を訪れたとき、彼は何の前置きもなしにそう言った。うつすらと白い無精髭の生えた頬をこすり、本田さんはときおり喉に唾を溜めてティッシュに痰を吐いた。そのたびに家政婦がこちらに振り返り、目に見えないビン底眼鏡のモダンをさつと両耳にかけられたかの如く顔をゆがめた。

「水が悪い」と僕は意味のわからないまま復唱した。それから声を張って続けた。「水が悪いんですか？」

「うん」とややあつて低くうなるように本田さんは言った。「要するにだな、あんたはもう少しゆとりというやつを持って生きなければいかん。自分の臓腑を傷めるような真似はしたらいかん。わしもノモンハンでは水に随分と苦労した。ノモンハンには水がまったくなかった。戦線が錯綜しておつて、補給というものが途絶えてしまったのだ。水もない、食糧もない、包帯もない、弾薬もない。あれはひどい戦争だった。後ろの偉いさんたちはどこをどうやって占領するかというとしか頭がないのだ。補給のことなど誰も考えて

はおらんかった」

「それはなんていうか、流れのようなものが悪いということなんですかね？」

彼は構わず続けた。「わしは三日間ほとんど水を飲まなかったことがある。朝に手ぬぐいを出しておく、それにわずかに朝露がしみて、それを絞って数滴水を飲むことができたが、それだけだった。それ以外に水というものはまったくなかった。あのときは本当に死んだ方がましだと思った。世の中に喉が渴くほど辛いものはない。こんなに喉が渴くくらいならいつそ撃たれて死んだ方がましだと思っただけだった。かたわらでは腹を撃たれた仲間たちが水を求めて叫んでおる。気が狂ってしまうものまであった。あれはまさに生き地獄だった。目の前に大きな河が流れておる。そこに行けば水はいくらでもあった。でもそこまで行けんかった。わしらと河とのあいだには火炎放射器をつけたソ連の大型戦車がずうつと並んでおった。機関銃陣地が針山みたいに並んでおった。丘の上には腕のいい狙撃手も構えておった。夜中にも奴らはどんどん照明弾を撃ち上げた。わしらの持つておるのは三八式歩兵銃と、ひとりあたり二十五発の弾丸だけじゃった。わしの戦友の多くはそれでも河に水を汲みに行った。ひとりも帰ってこなかった。みいんな死んだ。なあ、あんたも無理はしたらいかん。行動する機を窺うんだ。そしてその機を絶対に逃したらいかん」

僕は返答に窮した。彼の度外れな声がかんがんと頭に鳴り響いていただけでなく、その話があまりにも想像の範疇を超えるものだったため、なによりもまず話の凄みに対して息を呑んでしまったのだ。僕はつばきを飲み下して言った。「つまり僕はしばらく死んだまままっていた方がいいということですか？」

「そのとおり」と本田さんは深く肯き、部屋を震わせるほどの声量で言った。「死んでこそ、浮かぶ瀬もあれ、ノモンハン！」

そのとき家政婦が布巾を持った手を止め、目をぱちくりさせながらこちらに顔を向けていたのは言うまでもない。本田さんは奥行き

というものを欠いた瞳で、半分悦に入るように頭をもたげて、数ミリ離れた両の唇の端を微かに震わせていた。

第二章 「満州の生み出した幻影、想像の行き届かない地点」

それから本田さんは一時間ばかりずっとノモンハンの話を続けた。当時まだ十六歳だった僕には、課題うんぬんを差し置いても十分興味深いスリルに富んだ話だった。彼の口から聞く戦争は、その手の話がとかく陥りやすい善悪やら主義やらのなんやかやを超え、事実のみを伝えることでより残酷と生々しさを際立たせた。それまで隣にいた中尉の頭がある瞬間に砲弾で半分吹き飛んだり、ソ連の戦車に飛びついて火炎瓶で兵士を焼いたり、砂漠に不時着したソ連機のパイロットをみんなで追いつめて射殺したり……、そういう話ばかりを本田さんはした。歴史がどう動いた、こう動いた、というような話は一切ない。つまるところ、実際の兵としてノモンハンに駆り出されていた本田さんにとって政治は管轄外だったということになる。なぜなら当時の彼らにとって政治とは言わば現時点でその戦争、戦線が有利であるか不利であるかという意味合いしかもたなかったからだ。彼らは直進しろと言われれば直進し、戦えと言われれば戦った。たとえそれが死と同義であっても、だ。もちろん行き先がどこであれ、肩には唯一の頼みである三八式歩兵銃をひっさげていたわけだが。

僕は話の途中いちいち口を挟んだり、面倒な質問を投げかけたりはしなかった。彼はむしろひとりでもくもくと事実を伝えたがったし、なにか質問したところでどうせ聞き流されてしまっただろう。彼の魂——人はそれを幻影と呼ぶ——は依然ノモンハンで戦争を続けていたのだ。僕は途中からまるで自分がどこかに隔離されていてそこから彼を覗き見ているような錯覚にとらわれていた。おそらくはある種の淡い経験によってもたらされる信用のおけない猜疑心が、現実と夢物語が意識の奥底でいさかいを続けていたせいだろう。老人の途切れることない話は延々と僕の耳に注がれているが、彼は僕に対して話しているわけではない——おそらくは過去の亡霊に向か

って、だ。けれど実際に彼は戦争を体験し、僕は戦争というものの意味すらほとんど把握していなかった。というより、事実想像が追いつけないでいたのである。

ともかくもその講義は少なからず僕の血肉となり、戒めとなり、具体的な想像へのなかだちとなった。大体の話を聞き終えたと僕は大きな声で礼を言い、その生きた化石を思わせる老人に対して畏怖の念を抱きながらもそれと同時に絶大なる愛着を覚えた。家を出た後で胸いっぱい新鮮な空気を吸い込み、僕は話の要点だけを頭の中で整理しながら帰った。そうこうするあいだに夏休みも終わり、課題を提出した以後、彼の好きな銘柄の一升瓶を持って礼を言いに行ったつきり、彼とは会っていないかった。

僕は社会科ノートの十二ページ分の余白をばらばらと捲くりながら本田さんのことを思った。彼が今生きているのかどうかもわからない。けれど不思議と死んでいるような気はしなかった。たぶんそれはあのときのイメージが、今となってがみがみとした頭に響く声だけをそぎ落とし、どこかしら蟲惑的な印象を脳裏に植えつけているからに違いない。今でさえ目をつぶると、まるで標本のような老人の顔がずっと眼前に浮かび上がってくるのだ。

僕は「ふむ」と一声ノートを部屋の隅に放り投げ、湯を沸かしてコーヒーを入れた。気温は昼に比べるとずいぶん過ごしやすい温度にまで下がっていた。部屋の時計は二十一時十二分を差している。あのあと梓からの連絡はない。中野というヒントをもらっても、僕には具体的にどこに行っているのか見当もつかなかった。異性の交友関係というものは、ひとたびこちらの手を逃れてしまうことであるきり想像の外へ飛び出していつてしまう。例えばどこに行くとしたって、「これからちよつと舞踏会に行くから」なんてのとほとんど変わらない。これも事実僕に僕の想像が追いつけない例のひとつだ。

しばらくコーヒーを飲みながらぼんやりとテレビを見ていた。放

映されていたのはよくわからない恋愛を中心としたコメディのよ
うなものだったけれど、約一時間ものあいだ唇をぴくりとも動かせ
なかった。それでいてチャンネルを回すことすら億劫でならない。
どうやら僕は今日いちにちでかなりの労力を消費したということら
しかった。それから顔がひりひりとし、汗の掻きすぎで腹のあたり
がこそばゆいことによりやく気がついた。こうして夏は毎年、その
季節のあいだ僕をほんの少しずつ歪みへと導いていくのである。…

…

第二章 「木立のねじまき鳥、電話でのやりとり」

近所の木立からギイイツという、まるでねじでも巻くような鳥の鳴き声が聴こえた。臀部に痛みを感じるまで床に座り、ようやく立ち上がって鞆にノートをしまおうと思ったとき、ふたたび漱石の「こころ」が目に入った。僕は鞆を半端な高さに吊り上げたままため息をつき、こいつの処遇について頭を悩ませた。やれやれどうしたって俺の意識に食い下がるつもりだな、という目で僕は本を見た。本はカヴァーが剥がれ、元の状態に比べるとひどく強張って古びたものに見えた。ということはたぶん元の状態を目にしているはずなんだろう。

仕方なしにテレビを消し、僕はクローゼットの奥をあさった。昔に使っていた財布の中に何かヒントがあるかもしれない。図書カードやレシート、そういった何かだ。というのも、このままぐずぐずと誰か他人のものを身近に置いているのは性格上気が進まないからだ。しかし財布の中にそれらしきものの見つかる気配はなかった。なにより数年ぶりに見かけた自分の皮財布は（たしか中学時代に二つ上の従兄弟からもらったものだったと思うが）、誰か他人の遺物みたいに重々しく感じられた。

僕はそのあとで実家に電話をかけて訊いてみた。

「ええ、なんて？ 図書カード？」てつきり仕送りを催促されるものだと思っていた母は、釣り込まれるような感じでそう訊いてきた。

「別に図書カードじゃなくてもいいよ」とつつけんどんに答えた。母親の過剰な反応にいささか神経を逆撫でされていたのだ。「でもたぶん図書館で借りたのは間違いないと思う。最後のページに字はだいぶ薄れてるけど判が押してあるし……返したいんだけど……」

「ふうん」謎が解け、その瞬間に興味の灯火はついと消えたらしかった。「別にいいんじゃないの。もう何年も経ってるんでしょ

？」

「いったい何年が過ぎたのだろう。僕はいったいいつこの本を借りたのだろう。」

「たしか小学生のときだったと思う、たぶん。子供のころっていうのは間違いないんだけど。」

「たしかに自分で借りたのね？」

「うん。まあ」

「じゃ自分で返しに行きな。そういうのは自分の手で返さなきゃ駄目よ」

その言い方がどこか分別くさかったのと、十年來の非を今さら咎めるような押しつけがましい倫理観を含んでいたせいで、僕はとっさに受話器を離して「ああ、もう」と壁に向かってつぶやいた。おかげでまた受話器を耳にあてがったとき、勢いあまって柄の部分の前歯にコチリとぶつつけてしまった。

「何やってるの？」

「返さなきゃいけないのはわかってるよ」と僕はいくぶん激しながら早口で言った。「絶対に自分の手で返すし、誰にも死んでも迷惑はかけない」

「何怒ってるの。気が短い」

僕は電話を放り投げてしまおうか本気で迷った。

「明日帰る」、そう言つて電話を切った。

次の日もまたおそろしく暑かった。梓から電話があつたのは正午のことだ。何か忘れ物はないかと部屋をうろろしているときに、携帯電話がワルキューレ騎行を奏で始めた。あたふたして電話を一度床に落つことし、あわてて拾い上げると、真夏の光線が窓から目の奥を刺した。

「もしもし」

「もしもし？ なにしてた？」

僕はそれまで向いていた方向から顔を背け、手の指で両目をもみ

しだいた。

「蝉の鳴き声に耳をかたむけてた」

「嘘つき。——ねえあのあとどうした？」

「どうも」と僕は目に涙を浮かべながら短く首を振った。「まっすぐ家に帰ったよ。君は？」

彼女のテンポよく弾んだ声に促され、僕もいつのまにやら早口になつていた。彼女は電話口で「へへっ」とあどけない笑みをこぼした。

「どこに行つたの？」と僕はもういちど訊いてみた。

「自分こそ」と彼女はもったいぶった。

「だから家に帰つたんだって」と僕は笑った。「今日はまた別だけど」

「何？ どこか出かけるの？」

「実家に帰る。図書館に本返さなきゃいけないって」

「えっ、君まだあそこに通つてたの！」

「違うよ。さすがにそこまで馬鹿じゃない」

「じゃあ何しに行くの？」

「だから本を返しに。——ずっと昔に借りた本を部屋で見つけたんだよ。漱石の『こころ』」

「へえ。『こころ』かあ」とふんわりした声で彼女は言った。「なんか懐かしい」

第二章 「とにかくこのようにして一日分のねじが巻かれるのだ」

僕はふたたび部屋をうろつき始め、抜け殻のようになったシャツを足の甲で隅に寄せた。

「別に今日は学校に行かなくてもいいんですよ？ 昨日だけだよ
ね」

「あ、ちょっと待って」と彼女は言い、しばらく電話口を離れてなにかごそごとと物音を立てた。「……あとは八月の二・三日に——ちゃんと聞いている？」

聞いている、と僕は答えた。

「あとは八月の二・三日にもう一回病院で立花先生の講習がある。でもまあそれには出なくてもいいみたい。評価には響かないんじゃないかな、わかんないけど」

「オッケー。ねえそれで——」

「ねえ」とほとんど同じタイミングで彼女が言った。「それで昨日わたしがどこに行ったか知りたいんでしょ？」

「知りたい。どこに行ったの？」

「ヨシのところ」そのあとで彼女が電話口でにんまりと笑うだけの沈黙があった。「昨日わたしヨシのところに行ってたの。君に内緒でね」

「義弘？」と言って、僕は部屋の本棚を見上げた。それから電話を頬と肩のあいだに挟み、目についた本を手にとつてぱらぱらとめくった。「どうして黙ってたの。言ってくればよかったのに」僕は目で文字を追った。「——とにかくこのようにして一日分のねじが巻かれるのだ」

「なんて？」

僕は元あった場所に本を戻した。「なんでもない。それで？」

「でね、本当は君も誘おうと思ったんだけど、久しぶりだから二人つきりで会おうってことになったの。別に仲間はずれにしているわ

けじゃなくて」

「ひどいな」と僕は言った。「それで？ 二人でどこに行ったの？」

「ああ、今高円寺に友達と住んでるんだって。別になにもしてない。どこかに行ったりとかは別にしなかった。ドトールに入ってコーヒー飲んで、あとはそこらへんをぶらぶらと……」そこで彼女の声が遠ざかり、また戻ってきた。「ぶらぶらして、あとは御飯食べて帰ったよ」

「へえ。どう、感じ変わった？」

「え、どうだろう。わかんない」

「だって半年も会ってないんだぜ！」と僕は大きな声を出した。

「どこかしら変わってるはずだよ。絶対に」

「そうかなあ。まあちよつとは緊張したけど」

「そりゃあね。半年ぶりだもんしょうがないよ」

「君によろしくって言ってたよ。こっちに来るときは電話しろって」

「わかった」と僕は言った。「電話してみるよ」

「番号は知ってるんでしょう？ すぐかけてみれば？」

番号は知っていた。けれど今すぐに電話を掛けてみる気にはなれなかった。

「じゃあそういうことだから」と電話の終わりに梓は言った。「君のお母さんによろしく」

わかった、と僕は言った。

支度を終えて家を出たのが昼の二時だった（もつとも梓との電話が思いのほか長引いてしまったのが主な遅延の原因だったわけだが）。外に出て以前は泥だったことを思わせる、迷路そっくりに固まった土を踏むといとも簡単にぼろぼろと崩れだした。公園のフェンスに絡みついた蔓も、水を欲するあまり息絶え絶え蛇口に向かい突き進んでいる。言うまでもなく外は気違いじみた暑さだった。歩くと

び蠟人形よろしくぼたぼたと汗が垂れ、そのうちのいくつかはアスファルトに黒い染みを作った——しかしそれですら数分後には渴ききってしまうような暑さだ。

夏休みに二日続けて電車に乗るなんてことは、僕としては心の底からうんざりな出来事だった。なにを隠そう僕は電車という乗り物がこれ以上ないほど嫌いなものだから。それも実家のある千葉までは、なにがあるかと一時間以上はかかる。僕は駅までの道のりになるべくエネルギーを消費しないように歩き、木陰があればその下を通るようにした。けれど時により気休めほど人を消耗させるものはない。諦めてタクシーに乗ったのはそれから七分後のことだ。

電車の中で僕は仕方なく鞆から「こころ」を取り出し、静かにそれを読んだ。電車の中では車輪の音とアナウンス、それから車両の奥で母親の腕に抱かれた赤ん坊の泣き声が響いていた。「こころ」は七十八ページにしおりが挟まっていたが、僕にはそこまで読んだ覚えがなかった。たぶん初めのうちで投げ出してしまい、適当なページにそれを挟んだのだと思う。そしてページを捲くるうち（それがどの駅に着いたあたりなのかは思い出せない）、それまで弛緩していた一本の紐が頭の裏側で大きな輪を描いて収束したような気がした。おかげでこの本を途中で投げ出してしまった理由もわかった。当時まだ歳若く、心に傷を負いやすかったころの僕は、「こころ」を読むことである決意を揺さぶられるのではないかと恐れていたのだ。まだその決意を決意として自覚することすらままならなかった若き時代においてさえ。

小学生のとき「こころ」に失敗して以来、僕は夏目漱石の本を読んていかなかった。だが決して僕は本を読まない人間ではない。本は僕という小世界の中であつてから絶大な存在を誇っている。それはゴルフアーにとってのクラブであり、海峡にとっての栈橋に灯る明かりだった。初めて読んだのはたぶん、ロアルド・ダールの童話だ。

続いてアーネスト・ヘミングウェイ、J・D・サリンジャー、ヘルマン・ヘッセ、チャールズ・ディケンズ。そして成長するにつれ、僕はその領域をもっとずっと広げた。例えば、ウィンストン・チャーチル、森鷗外、フォードル・ドストエフスキー、フランツ・カフカ、F・スコット・フィッツジェラルド、ジークムント・フロイト、谷崎潤一郎、セーレン・キルケゴール、フリードリヒ・ニーチエ、ヨハン・ヴォルフガング・フォン・ゲーテ。

もっと昔の文献だって僕は読んだ。アリストテレスにホラーティウスに形而上学に関する本まで。けれどどうしても夏目漱石にだけは手を出すことができなかった。というより、漠然とした恐れが、過去の亡霊が別のかたちをとって意識の隅に居座り続けていたからに違いない。そしてその恐れとは、「こころ」を読むことによって僕の心が一時なりともばらばらに分解されてしまうことからだった。もちろん人は生きる過程で傷ついていかねばならないし、また傷心なしに教養を学ぶことはできない。けれどなまじ選択を与えられると、我々は無意識のうちに安易な道を選んでしまうのではないか、ということだ。肉体的な痛みであればきっと僕は耐えられただろうし、進んで挑んだに違いない。子供というのはそれだけで何かに挑む無垢な強さを持っているはずである。けれど彼らは（あえて彼らと呼ばせてもらえば）、そのあまりの無垢さに、回復と成長とをうまく把握できていない。僕は漱石の「こころ」を読むことで知りたくない、忘れかけた真実を見ることになっていた。そしてそれは漠然と、曖昧な時間の経過によって支えられた事物を根本から揺り動かしてしまう危険性があつた。「こころ」を読み終えたあとに当時の僕が僕自身でいられる根拠はどこにもなかった。僕はこの本を読まないことで様々な想いを封印し、わざわざ自分を身動きのとれない位置へと導いたのだ。それが故意であつたのか、そうでなかったのかは別として。

第三章 「失うことを知らない世代」

小学校二年生のころに街へ越してきて、まず声をかけてくれたのが梓だった。

「東京から引越してきたんでしょ？」

僕がそのときなんと答えたのかは例によって覚えていない。今でさえ、僕が覚えているのはある瞬間に——それは秋ごろだったと思うが——焼きついた写真のような彼女の笑顔だった。幸せに満ち、疑いのような薔薇色の未来が広がっていることを確信させる笑顔。髪は肩越して切り揃えられ、背を向けると太陽が彼女に祝福の光を与える。僕はそんなに澄んだ瞳を、美しい髪を見たことがなかった。体中のどこを見渡しても一点の曇りもない（そしてそれが表層上だけでなかったことをのちのち僕は知ることになるわけだが）。

梓はとかく面倒見のいい子供だった。ずいぶん歳の離れた妹がいたから、とか、ママがそういう人だから、という説明をいつだか彼女の口から聞いたことがある。転向してきて初日、悪夢のうちを転げ落ちるような環境の変化があり、僕は見事なまでに浮き足立っていた。その証拠として誰もが僕を垢抜けた気取り屋で無口な人間だと決めつけた。その帰り道で彼女が唐突に僕に声をかけた。気の毒な素振りはなく、どちらかと言うと好奇心からだったろう、肩に添えられた小さな手の感触を未だに鮮烈に覚えている。——不思議なことだけれど、記憶というのはひとつの物語のように連続していない。僕が覚えているのはやはりぞつとしたとか、どきりとしただとかのそういう体験ばかりだ。

ともかくもそんな風にして梓は友達のいない僕を誘ったのだが、その日の夕方には彼女の隣に野方義弘という同年の男子生徒がいた。彼は梓の家の近所に住み、小さいころから暇さえあればどちらかがどちらかの家に足を運んでいた。少年時代、誰もが往々にして

そうであるように、我々は半日と経たずしてある種の絆を結んだ。それはごく簡単なことではなかったけれど、失うことを知らない世代には新たに手にしたもの全てが光り輝いて見えていた。我々はその日だけで川原で水切りをし、秘密基地を作り（ただしこの場所へは以降二度と足を運ばなかった）、二人は普段禁じられているというテレビ・ゲームをやりたいとせがんで僕の家に来て来た。しかしその時点ですら僕と義弘にある種の対抗意識がなかったかと言えば嘘になってしまうだろうと思う。何もかもが始めから決まっていたことのように、僕らは高畑梓を中心に回っていたのだ。

義弘の身長が伸び始めたのは男子のそれよりずっと早い時期だった。小学校六年生のときに百六十五センチを超え、一時期スポーツ全般は彼のためにあるようなものだった。しかもそれだけじゃない、彼は学問もできた。それも尋常にできると呼べる範囲でなく、とてつもなくできた。その証拠として、彼はたびたび学校生徒を代表して当時の知事やらなんやらとも顔を合わせていた（知っているかぎり二度だが、一度目はアクアラインの完成時で、もうひとつは忘れてしまった）。

僕らは分別なく争い続けた。勉強、スポーツ、バレンタインにもらえたチョコの数、その他ろくでもないものから意味のあるものまで。もちろん意思表明のようなものは一切なかったが、一連の物事について回想すると、息の詰まるような緊張が今でも胸をよぎる。子供とは時によって大人よりずっと小ざかしく、面倒にできているものだ。でも考えるにいったいこの僕がどうしてそんな人間に勝てただろう？ 勝負は当然のごとく大抵は僕が負けていた。野方義弘は、特に子供のころだが、まだ道というものはつきり示されていない時代、ただその存在だけで他人を自己嫌悪に追いやるような人間だった。彼はパーフェクトだった。あまりにも出来すぎたくらいに。

けれどこの陳腐とさえ言える化身の存在は、彼自身が劣等感をその身に抱くことでぎりぎりこの世のものとして具現されていた。何かにつけ必死になっている姿を目にしているせいだろう、義弘の渴いた印象が強く残っている。それが梓の気を惹きたいがためのことだと気づいたのは程なくしてすぐだ。彼の持つものが馬鹿馬鹿しいくらいに恵まれた才覚だったがため、梓はいつも僕に声をかけた。倫理と裏切りの煩悶に揺らぎながらも、僕自身もそれを拒もうとはしなかった。それに彼女もひどく頭が良かった。そのころの僕は大概なにかを与えられる側の人間だった。つまり、いくら仲が良かったと言っても、傍目からすればまるきりお荷物みたいなものだったのである。成績は必死で勉強して彼らの一段下か二段下に追いつくのがやっとだったし、スポーツはもちろんのことマラソンも駄目、常に僕は彼らを見上げ、なににしたって半歩遅れていた。人生のうち苛みを経験した者なら誰にでも想像がつくとおり、それは僕の少年時代に凄まじいばかりの劣等感を与えた。その苦しみは義弘の持つ劣等感が子供だましになるほどに違いない。事実、誰も僕の劣等感に気づいた者はいないはずだ。人は本物の劣等感を抱えたとき、目標を達成するまでは決してそのことを口外したりはしない。それも子供だったら尚更である。

けれどもこうも思う、だからこそ僕は半歩で済んだのだ、と。例えばゲーテの言葉にこういったものがある。

「誰もが素晴らしい人間になりたいと願っている。一方、成長することは誰も望んでいない」

もしもあの時代に虚栄心に取り憑かれ、これ以上ないほど醜いと言われる卑屈な人間になっていたらとよく考える。輝かしく見えるものの全てに欠点を見出し、他人の話に一切の興味を示さず、全てを自らの価値観でしか見定められない人間に。むしろそうならなかったのは奇跡に程近い。僕は身に余る素晴らしい友人を持ち、同時に彼を激しく羨んでもいた。僕を自らの小世界にのみ固執する塵芥に変えなかったのは、誰であろう彼のおかげでもあったのだ。ただしその

代わりにかつてあつた劣等感は姿を変え、今やその戒めは僕の血肉となり、却つて他人の機嫌を損ねることに敏感な、言わば懷疑主義的な人間に変わり果ててしまった。人の成長がそのときそのとき紡ぎだされる気分の連続であるとすれば、僕はそれをひとつひとつ仔細に点検し、時々によつて肯いたり首を振つたりしながら生きてきた。そうして概ね抑圧しながら人生を送る上で学んだのが、僕の考える教養そのものだった。

第三章 「ささやかれるロマンス、その背反、残酷な青春」

梓はそんな拙い時代の僕をサポートしようと常から心がけ、そのせいで何度か僕と彼女のあいだのロマンスが周囲でまことしやかにささやかれた。けれどそれもしばらくのあいだのことで、大体は一月もすると立ち消えになった。というのも、周囲からすればどうしたって義弘の魅力が断然僕を上回ったし、実際そいつた噂がささやかれる割合は義弘の方が多かったはずだ。けれど彼はそんな噂を耳にするたび傷ついただろうし、それは僕も同じことだった。なぜなら彼女は僕のことと義弘のことと愛してはいなかったから。

ふたたび時代を遡るが、義弘は長いあいだ梓を真の意味で理解することができていなかった。それはおそらく頭の良さとほとんど関係なしに、経験から飛来するものだろう。身を貫くような劣等感と引き換えに僕が一足早く観察眼という予覚のようなものを手に入れていたわけだった。義弘は恋敵に勝利することで彼女の心を動かせると本気でそう信じ込んでいた。彼のまだ拙く性急な想像は城に囚われた姫を助けるため、今まさに神秘なる無数のドラゴンと前時代的な決闘を始めようとしていたのだ。それらすべてが無益なことだとわからずに。

義弘はなにかの食い違いを感じながらも若さゆえ強引に直線し続け、勝利し、そして結果的には何人かの嫉妬の目と、その数倍にも当たる尊敬の眼差しをその身に注がれることとなった。しかしどのような賛辞も彼を満足させるには至らなかっただろう。どうしたって梓が声をかけるのはこの僕だったからだ。僕としてもそれは気の毒なことだったし、いつも心のどこかで彼女にそんな風にしてもらうことを後ろめたくも感じていた。でも念を押すうだけけれど、そのころの僕に何かを変えられる力はなかった。自分の言いたいことさえうまくはつきりとは言葉にできないような年齢だった。たしか

に他人についてよく観察することで学んだものはたくさんあった。けれどもそういった知識が往々そうであるように、実際に体験してみなければ納得のようなものは得られない。そのときの僕にできたのは、自分の無力さを呪い、義弘や梓に一步でも近づこうとすることだった。若さゆえのいささか想像を欠いた現実性が与える、陳腐で単一な望みにすがってだ。僕は方法というものをまるで知らなかった。自己嫌悪の海から自らを引き上げることに成功したのはごく最近のことである。そのとき僕は子供ながらに強く信じたものだった——もしもこの時代を青春と呼ぶのなら、青春ほど残酷で人を惑わす時代はない、と。

付け加えておくと、僕の学力や体力がそれほど学校の連中から劣っていたわけではない。学力でなら、僕は学年でも上位をキープし続けていたし、決して運動音痴というわけではなかった。しかしやはり、彼らが群を抜いて優秀であったがため、こんな風に今でも過去の自分を見下げてしまうのだろう。事実、中学校に入ってからというものの高畑梓と野方義弘の能力は県境を越え、関東一帯でも名が知れるほどトップクラスの学力を三年間保ち続けた。特に義弘は数学では一問たりとも不正解を出さなかった。三年ものあいだ、ただの一度も間違いをおかさなかったのだ。

テストのあと、廊下に貼り出された順位表に二人の名前が一位と二位で並んだとき、生徒たちは二人が幼馴染ということもあって冷やかしを送ったが、それが三年間動かぬことを知ると、もつと別の目を向けるようにまでなった。部活もそうだ、義弘は早い時期からサッカーで県選抜、梓はバレーボールでインターハイ。この先は想像がつくとおり、今まで半歩遅れながらも彼らにつき従ってきた僕だって、いくらなんでも身体的能力ばかりには限界があった。それらには明らかに類まれなるセンスが必要とされていたからだ。

僕が本格的に読書量を増やし始めたのもそのころのことである。僕はスポーツよりも、果ては勉強よりも本を読んでいることの方が

ずっと自分に合っているような気がしていたし、それまで中途半端に身を置いていた水泳部の活動が三年生の半ばに終わりを告げたことで急激に暇を持て余す身分にもなっていた。そんなこんなで暇つぶしに市の図書館へ出入りを繰り返すうち、いつの間にかやら図書館にある本を片っ端から読破してやるうという気になっていた。十代半ばにありがちな、自分の能力にハクをつけてやるうという魂胆もそのときはあつたかもしれない。でも結果的に、それが十代にありがちな哲学あるいは陳腐な学説の生かじりみたいなものにならなかつたのは我ながらとても幸運である。それは僕が彼らに優るゆい一つの知識であつたし、同時に僕だけの喜びでもあつた。いつだか梓は黙然としかし激烈に本を読み進める僕に、将来は小説家になることを勧めた。しかしすでに、というか、僕にはかつて小説家を目指していた時期もあつたのだ。

「それだけ読んでればいくらでも書けそんなもんだけど。やつぱり違うの？」

「駄目だよ、無理」と僕は言った。「なんていうか、読むのと書くのって全然違うんだ」

「そりやまあね——そうだろうとは思うけど」

「そういう才能があつたらよかつただけだね」

「でも」と梓は無理に笑顔をつくつた。「そうやっていつでも読書を楽しんでるんだから、きつと書く方じゃなくて読む方の才能を授かつたんだよ。神様から」

彼女の気休めに対して僕がどんな言葉を返したかはわからない。にこりと微笑んだかもしれないし、大方はそうだろうと思う。しかし小説家になれないことに対してそれほど気落ちしているわけでもなかった。本が読めればそれでいい。彼女の言つた本を読む才能なんてものがあるとすればだが、そんなものは大概の人間に備わつていそうなものだったからだ。けれどその言葉は少なからず僕をほつと安心させたし、同時に何かが身からそつと失われる哀愁を感じさせた。

梓の身長と僕の背丈にはつきりとした差があらわれたのもちようどこのころのことだった。それまでの僕にとって、彼女は友達以上の存在ではあるにせよ、どこか歳の近い姉を思わせる部分があった。だが体格的に彼女を上回ったことで、僕の意識は運命的に傾き始めた。そのころの義弘のように、僕もちゃんとしたかたちで彼女への想いを胸に据えることができたのだ。

第三章 「リビドー、卒業式での一幕、不穏な報せ」

その後、のちのち神格化されるのではないかというほどの成績で二人は中学を卒業し、関東でも有数の進学校に危ぶまれることなく入学した。そしてこの僕もぎりぎりなんとか（とは言え彼らのように授業料なんかやかを免除してもらえたりは当然しないのだが）晴れやかな気分で新しい季節を迎えることができていた。梓も義弘もスポーツ先進校（特に義弘は船橋にある高校のスカウトから執拗な勧誘にあっていた）からかなりの待遇を用意されていたけれど、結局は二人が二人とも学問の道を、つまりは確実な将来性をとることとなった。そうして我々は小学校から続く関係を高校生活にまで持ち込むことになったのである。

卒業式のことだが、その日義弘は彼女に自分の気持ちを告げようとしていたに違いない。そわそわと落ち着かない様子で彼女の肩口をじっと眺め、時おり手を伸ばそうと試みたためか体をぴくりと震わせた。けれど彼女は部の下級生にずっと囲まれていたし、ただでさえ別れの感慨にふける彼女に愛を告げるのは場違いではないにせよ、慎みを欠いた行為に思えた。彼自身も何人かの後輩たちに囲まれていたのだが、ほとんど上の空だった。義弘の体が空いたとき、僕はそつと寄って行って声を掛けた。

「今はやめた方がいいんじゃないかな」と僕は言った。言葉以上の意味があつたわけではなく、ただ単にそういう雰囲気だったからだ。

義弘は僕に半分だけ振り向き、頭の中で僕の言葉を繰り返して再生しながら、そこに含まれた意味合いを追い続けていた。やがて彼の目玉の中でのなにかがめまぐるしく動いた。

「ヨシ？」

「うん」と彼は事のほかたしかな声で言った。「今はやめておく」彼はもはや核心に近づきつつあった。長らくリビドーの影を追い、

今ようやく原点に立ち返ろうとしていた。

それは僕にしかわからない動物的な勘に他ならない。生ある我々は時として、それを精神感応^{テレパシー}と呼ぶ。口に出さないのはただそれが野暮というだけのことだ。僕にはなぜ彼女への告白が憚られるのかよくわかった。義弘は無意識のうちに知を得ていたのだ。あるいは反対に、無意識のうちに知から目を背けていた——そう、真実からそして背反の拳句、凍結した彼の心の歯車を動かしたのは高校二年の冬だった。

僕はそのとき実家の自分の部屋で暖房をつけながらゆつくりと本を読んでいた。すぐ近くで花火がしゅるしゅると昇っていくような風の音が聴こえ、僕はベッドの上で何度か体勢を変えた。そのとき僕を夢中にさせていたのがどんな本だったのかについては思い出せない。おそらくはゲーテのファウストだったかと思うのだが、こいつは近來棚の奥に眠ったままずいふんと姿を見せていない。そのうち一階から聴こえる雑音の高低が母の怒鳴り声だということに気づき、のろくさ部屋を這い出ると、階段の下で電話の子機を手に持ち迷惑そうな顔を浮かべる父の細君が登場した。

「あんたさつきから呼んでるのになにやってるの。ほら梓ちゃんから電話」

僕は母の一方的な剣幕に対して色々と反論できたが、梓を待たせてしまいそうだったので、いくぶんカリカリしながら受話器を引いたくり、大げさな足音を立てて二階に上がった。

「もしもし」と僕はもごもと言った。

「寝てたの？」

「寝てない。起きてたよ。——でもちよつとね」

「何？」

階段を上がったところで部屋に戻るのが急に億劫になり、僕は長く息をついて額に手をあて、廊下の途中で壁を背にしてへたり込んでしまった。廊下はとても静かだったし、電話の先も物音ひとつし

なかった。そのためかまるで壁の向こう側に梓がいるような錯覚が起こった。いやに落ち着いた彼女の声のせいもあったかもしれない。「風邪を引いてるかも」と僕は言い、鼻をすすった。実際それは適当な文句に他ならなかったのだが、不思議にも額にあてた手は熱を感じていた。「……やばい。本当に風邪かも」

「ねえ」と張り詰めた声で梓は言った。まるで僕の風邪うんぬんの話と対比して、改めて自分の中にあつた疑惑の重大さに気づいたかのように。「ヨシが怪我したの聞いた？」

「怪我？ 怪我ってどんな。ちつとも聞いてないよ」
「そっか」

それからしばらく、彼女は何か考えを巡らせているようだった。

「怪我ってどのくらいの——」

「あ、ちょっと待って。後で掛けなおしていい？ すぐだから」
わかった、とひとまず僕は言った。それから三分後に電話が掛けなおってくるまでのあいだ、ずっと廊下の照明を見上げていた。

「お待たせ」と彼女は素っ気無く言った。「ねえどうしてだと思
う？」

「何について？」

「あ、ごめん違う」彼女は僕に焦点を戻そうと、何事かを聞き取れない声でつぶやいた。「——ヨシはね、部活で足を折ったんだって。わたし今日サッカー部のマネージャーからそれを聞いたの。だからそんなのおかしいくないかってこと」

「おかしいね」と僕は同意した。「足を折った？」
「うん」

「足を折った——足を折った？」と僕はもう二度ばかりそう繰り返した。その事実の重みを改めて計り知ることと動転し、ほとんど滑稽に至っていた。「でもどのくらい——なんていうか、すぐ治るものなのかな」

「わからない。ねえいつたい何だと思う？ 何でわたしに言わなかったんだと思う？」

彼女が「ねえ」という言葉を使うたびに、その焦りがひどく伝わってきた。僕は「ちよつと待って」と早口に告げ、機敏な動作で立ち上がり、部屋に入って鍵を閉めた。

「さあ。何か複雑な事情があつたんじゃないかな」と僕は言った。「わからない。そんなの全然……」

「訊いてみることはできないの？」

「もちろんできるけど、今日はもう無理でしょ。とりあえず明日行ってみるから、できればついてきてくれない？」

そのとき彼女の義弘を語る口調がどこかよそよそしかったわけに気づいた。

「えっ、もしかして入院してるの！」

「みたい。だから明日のお昼ごろにまた電話する。起きててね」

電話が終わると、ちよつと下から催促の声が聴こえた。今度は途切れ途切れに、はつきりと。——すぐ使うから早く、電話を、持ってきてちょうだい。

第三章 「病院、泥棒かかさぎの序曲」

次の日の午後四時に、僕らは電車に乗って義弘のいる隣町の病院に向かった。

梓は移動中難しい顔をしながら、ときおりそれらしい仮説を思いついたときにだけぱつとこちらに顔を向け、早口に唱えだした。「恥ずかしかったんじゃないかな？ いちいち見舞いに来てもらうほどの怪我じゃないって」、「親に止められたのかもね。友達が来ると勉強の邪魔になるからとかなんとか言われて」。彼女は不安に晒されていた。これらのすぎるような仮説も、明らかに自らの疑惑を打ち消すためのものだった。彼女の最大の恐怖はおそらく、義弘が怪我によつて大きな精神的ダメージを負ったのではないか、ということだった。僕は彼女の心に課せられた負荷を思つて体よく相槌をうち、時にはそれらしいことをぺらぺらと喋つて事態を束の間小事へと運んだ。しかしこれらの気休めは矛盾を通して僕を苦しめ、いつものように消耗させていった。そのころにはもう安易に偽善を受け入れられるほど僕の精神は若くはなかったのだ。

僕には義弘の秘密ごとについていくつか思い当たる点があった。でもそのことを梓に告げたりはもちろんしなかった。

病院に着くころになると辺りが夕暮れに侵され始めていた。小径がしめやかに影を背負い、道を抜けると家々の窓が一樣にぎらぎらと赤く燃えているのが見えた。一日経つて風はなりをひそめ、今はこそそこそと枯葉に息を吹きかけるに留まっている。それは十二月半ばごろだった。病院は東大のそれとは比べ物にならないほど陰気くさく、特色というものを欠いているせいか僕の目には不気味に映じた。それは梓も同じだったらしく、我々は入り口の前で一度止まり、口を微かに開いたまま顔を見合わせた。おかげでこれからなんだかいわくつきの建物に足を踏み入れるみたいな雰囲気になつてしまつ

た。

「ここだよな？」と彼女は平静を装って言った。でも左眉だけが不器用に釣り上がっていた。

僕は肯いて中に入り、緑色したスリッパを下駄箱から二足分つまんだ。漠然とした胸騒ぎが始まり、スリッパを床に置いた直後、手の震えを梓に隠し切れなかった。

「大丈夫？」という風に彼女は口を動かした。

「大丈夫だよ」と僕はなんでもない風を装って、ちゃんと声に出して答えた。

どうしてこんな病院に入院しなくてはならなかったのかという疑問が根強く二人の頭に残っていた。口に出せないことで、いっそうその疑惑の念は強まった。こんなところは誰だっけ見つけれない。

僕らは無人の待ちうけにちらちらと視線を投げながら、五分くらい長椅子に腰掛けていた。ときどきこのドアがぱたんと音を立ててしまったが、看護婦はいっこうに現れなかった。たまりかねた梓が待ちうけの丸窓に向かって身を乗り出し、呼び声してみたのだが、奥から反応がないことを見て取ると、こちらに向かって憤然と首を振った。僕もそのあとで同じようにしてみた。けれど結果はいっしょだった。丸窓の奥には書類だか薬だかが渾然として棚に収まっているだけだった。

「なんなの、ここ」と彼女は不機嫌に言った。

「さあ。ひよつとして休診——」長椅子に戻り、そこまで言いかけたところである重大な事実の予感に気づいた。果たしてもういちど入り口に戻って診察時間を確認すると、とうから自分たちが間違っていたことに気づいた。

「もう終わりなんだ」僕はガラスドアに向かって確信的にそうつぶやいた。それから待合室に振り返る。「もう終わりだよ。診察は終わってるんだ」

彼女は半端な角度に首をかしげながら、今しがた彼女の頭の上を

通り過ぎたものを目で追っていた。それから首を回して辺りを眺める。

「どうしよう」と僕は絶望的につぶやいた。「まだ四時なのになんで――」

「行こう」彼女は早口にささやき、あわてて立ち上がって僕の腕を取った。「今行っちゃおう。どうせ誰もいないんだし」

「え？」

「早く。今しかないから」

僕は数秒のあいだ躊躇した。とは言え、決心したところにはすでに引き返せない状況にいたわけだが。

階段を上りかけた拍子に、それを待ち受けていたかのような人声が耳元をかすめたが、梓も僕もそれを完全に無視した。病院は廊下が狭く、まばらに配された白い光だけが神経質な印象を院内全体に投げかけていた。途中で白衣を着たよく顔の見えない男がそばをさつと通り過ぎたが、彼はロッシー二の「泥棒かささぎ」の序曲を口笛で吹くことに陶醉しており、不審な足音には見向きもしなかった。あとになって、彼とおぼしき人物が一階に軽快な靴音を鳴らして下りていくのが廊下に響いた。

「でも本当にいる？」と僕はささやいた。

「いるとは思うけど」と彼女も自信なさげに答えた。

「何号室だった？」

「ニイマルサン」と彼女は答えた。

二〇三号室に入ったとき、夕陽の照り返しが強くて僕はその方角に手をかざした。手を下ろしたとき、病室の誰かがこちらに振り向くのがわかった。彼は意味深に目を細めていた。ホラー映画やなんかでよく見かける、犯人の謎に気づいた人物が殺される寸前と同じ顔だ。もしも今が夜中だったり、あるいは暗い森や墓場だったとしたら、彼の脳天に振り下ろされる斧の鈍い光を実際に見たことだろう。

隣で梓が大きく息を吸い込むすうつという音が聴こえた。でもその思念は言葉としては出てこないようだった。僕が振り向くと、彼女は嘘みたいに綺麗に泣いていた。

「どうして……」梓は聞き取れないほどの声でつぶやいた。

「ごめん」義弘は動転していたが、いつかのように声だけは確かだった。

僕は義弘の名をつぶやいた。でもそれに対しては誰も気を留めなかった。

「すごく心配したんだよ、わかる？」と梓は言った。

「ごめん」

それから運び手のないまま悲劇めいた雰囲気がいよいよ続いた。一分間が一時間にも思えるほどの煮詰まった沈黙だった。二人は長いあいだ見つめ合っていた。

「ねえとにかく二人とも——」僕は耐え切れなくなつて言った。

「どうして知らせてくれなかったの！」彼女の中の自制心が破綻し、調子はずれのヴァイオリンを思わせる耳をつんざくような叫び声となつて今まさに天井を貫ぬかんとしていた。「どうして！これだけ心配させて……何があつたの？ もうわたし……」

彼女は言い切るか言い切らないかのうちにくずおれ、涙がぼたぼたと病室の床に滴った。僕は彼女に手を差し伸べたのだが首を振られ、その途端になにか凄まじい力で胸を締めつけられたような感じがした。僕は身を引いて彼女を見下げ、それから義弘に振り向いた。「ごめん」と先ほどより力のない声で彼は言った。目の前にある光景に深くとらわれている様子だった。

僕はため息をついたが、肺がぶるぶると震えていた。彼女の涙を目にしたことでこれ以上ないほどに動揺していたのだ。

「いいよ。それで容態は？ 足を折つたって聞いたけど」

「足は大したことないよ」すかさず彼は答えた。「でもただ……」義弘はそこで言いよどんだ。僕はふたたび梓に手を差し伸べた。

「ただ色々あって……整理のつかないことが……」

「さあ立つて。向こうに座ろう……そう、こっちに」

梓はすでに自制心を取り戻しかけていた。立ち上がると目のふちに溜まった涙を指先で拭き取り、僕に手を引かれてよちよち歩きながら、まるで疲れきった子供のようにベッドのそばの三脚椅子に腰を下ろした。

「歩こうと思えば歩けるの？」

「まあ少しなら。痛みはあるけど」

「じゃあどこも怪我はしてないの？」と梓は顔を上げた。その表情はふたたび泣き出しそうに見えた。

「怪我をしてなかったら病院には入れないよ。部活で膝をやった。剥離骨折」

「なに、それは」

「人によってまちまちだけど、要するに激しい運動をすることで

――

梓が説明をさえぎるように何度か続けざまに肯き、それで義弘も今そんなものが必要とされてはいないということに気がついた。

「どのくらい入院が必要なの？」と僕は訊いてみた。

「ほとんど必要ない。というか、本当は入院しなくてもよかったんだ。でもたださっき言ったとおり色々と……」

「まだ何も聞いてない」と梓が小さな声でつぶやいた。

「たぶん一週間もすれば退院するよ。本当にちよつとのあいだのことだ」

「どうしてもつと近くの病院にしなかったの？」梓の口ぶりは涙を通り越し、半ば尋問のようになっていた。「それにここ信用できるの？　こんなところ……」

彼女は病室を見渡す途中でなにかを思い出したらしく、顔をゆがめて込み上げる涙を押しとどめた。僕はなにか新しい話題を切り出そうとしたのだが、その前に小さな咳をしたことで沈黙を助長する結果に至ってしまった。

「色々考えたいことがあって」としつこく義弘は言った。「それ

で落ち着ける場所にしようと思った。だから誰にもこの場所は教え
てないよ。聞いた人がいたとしたらたぶんうちの親が言った。ごめ
ん。別に二人から逃げようとかそんなつもりじゃなかったんだよ」

「そう」と梓は寂しげにつぶやいた。それからゆっくりと視線を
部屋の隅々に移したが、もう何も見えてはいない様子だった。

帰りの電車の中でほとんど僕らは言葉を交わさなかった。梓はず
っと下を向いていたし、僕は流れる夕闇の街並みを眺めていた。我
々の気持ちはこののち一時、三人が三人共ばらばらになっていた。
そしてその二週間後、退院した義弘はサッカー部を辞めた。理由に
ついて僕は知らない。

第四章 「帰省、ホーム、消えたヒゲラシの声」

電車が蘇我駅に着いたとき、僕はしばらく手に持った「こころ」の背表紙を眺めたままじつと動くことができなかった。あのとき義弘は何を考えてサッカー部を辞めたのだろうか？　それが安易で単純な決断でないことはもはや明らかだった。彼は何かに区切りをつけようとしたに違いない。そしてそれは義弘だけの問題ではなかった。彼は小学校からずっとサッカーを続けてきたのだ。それを切り捨てるということはつまり、ひとつの重大な決断に対して犠牲を払うという意味合いがあった。原因はおそらく梓に――そしてこの僕に――関連することだろう。そしてそれは概ね僕のせいかもしれないということ。

僕はあのと看どうするべきだったのか、という考えがふいに浮かび上がった。あのと看義弘は何を求めていたのだろうか？　必要なのは励ましてやることだったのか、悩みを聞いてやることだったのか、長い時間ただ一緒にいてやるべきだったのか。ひとつわかるのは、あのと看の僕にはなにかしらの行動が求められていたということだった。少なくとも陰鬱な病室に二週間置き去りにすることが誰かのためになるとは思えない。時に深みのないまごころとは人を決定的に傷つけ、根底から人生観を変えてしまうほどのものだと思うからだ。天才的な能力を持つ人間がどれだけのことを考え、どれだけの苦悩にさらされているかなんてことは僕には想像もつかないことだ。そのころの僕にとってだが、「類稀なる才能」とは雲の上を闊歩し、俗界を遠く離れた地で神々と交信しているような人物のことだった。けれどあのと看病室のベッドに力なく横たわっていた野方義弘は、少なくともあとの瞬間、僕と同じ十六歳の少年だった。

清掃員が隣の車両からわざとらしく物音をさせて入ってきたところで、僕は電車を降りて内房線のホームに移った。駅は人で混雑し

始め、車両の中吊り広告が順に新しいものと交換されていった。僕は電車を待っているあいだキヨスクで冷たい缶コーヒーと菓子パンを買い、ベンチに座って人の流れを眺めながらそれらを飲み下した。電車は二十一分に到着したが、僕はベンチから腰を上げることができなかった。人がぞろぞろと乗り込み、駅が閑散とした後でタバコを一本吸った。昼の光のせいでろくにライターの火も見えない。すでに額には汗が滲みかけていた。煙草を地面に捨てて靴底で入念に火種を消し、三十六分にもういちど電車が到着したとき、ヒグラシの声はどこからも聴こえてこなかった。

実家に着いたのは五時だった。気が滅入るころになってようやく昼の暑さは一段落を迎え、時おりだが人の心を騒がせる夏特有の夕風が襟を踊らせた。家の中からは掃除機をかけている大きな音が漏れ、その後ろから意味をなすかなさないかくらいの声量でキヤスターが新しいニュースを読み上げていた。二度目のチャイムで掃除機の音は止み、母がどたばたと玄関のドアを開けた。部屋の中は外に比べると穴蔵みたいに薄暗かった。

「ああ、ちようどよかった。おかえり」

「ただいま」と僕は言った。

「あのね、掃除してたら今図書カード出てきたの、ちようどよく——すぐ行く?」

「ちよつと待ってよ」と僕は言い、所狭い玄関を母をよけて家に入った。

「最近どう?」と母親は僕の背中に言った。「みんなにはついていけるの?」

「今は夏休みだよ」

「夏休みだったってあんた。もう大学生なんだから——」

靴を脱いで湿った靴下を途中どこかに放り投げ、僕は階段を上がつて自分の部屋に入った。下からすぐと母の呼び声が聞こえたが、僕は気づかないふりをした。

何ヶ月かぶりに見る自分の部屋は昔よりもずっと殺風景だった。

物欲に関して言えば僕はかつてからほとんど世捨て人のそれと変わらない生活を送っていた。と言うのは、要するにその手のどんな若かりし啓発もなされなかったということである。そのせいか部屋はたった今誰か別の人間がこの場所をあとにしたように見えた。そして帰ってくるたびに、自分が昔ここで生活していたんだという実感が薄れていく。しかしきつと過去とはそういう眺め方しかできないもののだろう。そうして人は少しずつなにかを得て変わり、あるいは失っていくのだから。

僕は鞆を勉強机に置き、ベッドの弾力をはかりつつ何度か大きく息をついた。壁は以前ポスターの貼ってあった箇所だけがやけに白く、他は大抵のものが埃にまみれていた。床にも何か物が置いてあったのかとどこどころが埃から四角く開けている。

それから僕は日程についてぼんやりと考えた——何日居座ることになるだろうか、と。三日か、それとも一週間か。しかし架空の日程は部屋の宙をとりとめなくふわふわとしばらく浮いていたあとで、ほどなくふいに消えた。大学の休みはおそろしく長いが、それは学生を墮落させるためのものではない、という言葉が耳の奥で執拗に語られていた。よろしい、と彼らは言う。君は休みを与えられたからといってその日々を無駄に過ごすのだね？　こちらとしてはそれでいいこうにかまわない。けれど世界は確実に進行していくのだよ、君だけが置いてけぼりだ。

かまうものか、と僕はつぶやいた。それから大きなあくびをして立ち上がり、棚に並んだ本を適当に手に取って、寝転がりながら気まぐれにページを捲くって夕暮れまで読み進めた。

第四章 「おぞましい悪夢、モンゴルの平原にて」

母親が二階に上がってくる足音を聞いたとき、僕はとっさに身を起こした。それは長年の習慣がもたらした意味をなさない動作のひとつだった。

「ノック」と僕はあわてて半ば苛立ちながら声を張り上げた。

「開けるよ」、そう言ったと同時に母はドアを開けた。

「ねえどうしてノックしないの」僕は本を乱暴に床に投げ、とげとげしく言い放った。「いつになつたら変わるんだよ。その性格」

「だって言ったじゃないのよ。開けるって」

「だから——」僕は言いかけて目をつむり、肩で大きく息をした。「だからね、開けるよって言って開けられちゃ困るんだよ。それじゃ意味がないでしょうが」

「じゃあなにか見られて困るものでもあるんだ」

母は意味ありげに微笑み、僕は相手を鋭く睨みつけた。馬鹿馬鹿しいことに、僕は家に帰ってくるたびこのような陳腐で愚かしく、その上滑稽な図に巻き込まれてしまうのだ。

「息子に恥をかかせて楽しい？」僕は心底から解しがたいというような表情を浮かべて言った。

「で、どうすんの」母はそれ以上取り合わなかった。いつものことだけれど、母となにか議論を交わすたびに、僕は乱立した思想の渦に巻き込まれているような錯覚を覚える。母と僕とは根底からなにかが違うのだ。「図書館には行くの、行かないの」

「行くよ。——なんで焦らせるんだよ。別にまだ時間あるじゃんか」

「あんたが決めないとこっちの予定が狂うの。図書館六時までだよ」

「予定なんかないくせに」と僕は忌々しくつぶやいた。「じゃあ明日行くよ。行くからもう下行って」

「明日は休館日です。ちゃんと調べてから来ないから」

「じゃあもう行かないよ！」

「何それ」と拍子抜けしたように母は言った。「じゃああんた何しに帰ってきたの」

「もう！ 要するに一時帰国つてやつだよ」打っちゃるように生返事をして立ち上がり、僕は母を部屋の外に追い出して勢いよくドアを閉めた。「お願いだからゆっくりさせて！」

そのあとも廊下で人の神経を逆撫でさせる母のぶつくさ言う声が聴こえたが、僕は本を床から取り上げてカリカリしながら無言で文字を追った。とても本を読める気分にならないことを悟ったあとで目を閉じて短い時間眠った。

その日は結局、家から一步も出ることなく終わってしまった。六時すぎに妹が帰って来て部屋に顔をのぞかせた。父親は八時すぎに帰って来た。僕は久しぶりに家族と夕食をとり、そのあとすぐにまた部屋に引きこもってかび臭いベッドシートに頭を押しつけた。しばらくじっと同じ体勢を保ったままで何事かに頭を働かせていたのだが、気づくと僕は部屋の天井をフレスコ画よろしく眺めることに没頭していた。よそよそしい部屋の質感に比べて、天井だけは僕を憂鬱ではあるけれど落ち着いた気分にしてくれた。それというのも昔にもこういうことがしばしばあったからだ。僕は頭の後ろで手を組み合わせ、視線を移ろわせながらまだらなその模様の意味合いを追い求めた。学校を休んだ日なんかに、こうしてほぼ一日中しげしげと部屋の天井を眺めていたものである。木目を部屋の端から順々に眺め、それを終えたと今度は雨漏りの染みを眺める。そのあいだに染みは蝶のかたちをとり、なにかしら不吉な印象のあるかたちをとり、最後にただの染みへと還って行く……そのような一見無意味と思われる行為も、楽しくはないにせよ多少の退屈を紛らわせてはくれるはずだ。それも今日のような場合においては、染みはいつもどこかしら幻想的に映じたものである。

移ろいで行く微弱な感情の中、本田という老人の顔がふいに浮かび上がってきたことで、僕の意識はふたたび繋がれた。水が悪いのはいかな、と彼は言った。水が悪い？ 今になってさえその言葉の意味はよくわからない次元に存在している。いやに不吉な真実味を帯びて。——無理はいかん、死んだつもりでおればいい。老人の言葉は小さな雨粒となってポツポツと僕の頭骨を叩いていた。やがてなにか大いなるものに包み込まれるような眠りがやって来た。おぞましい悪夢を連れて。

その夜に見た夢を僕は生涯忘れないだろう。

僕はそのときモンゴルの平原に立ち、空を引き裂いていくような日の出を眺めていた。息を吸い込むとそこには手つかずの大地の匂いがあった。僕は圧倒的なまでのそれらの情景に対し、信じられないというように首を振って狂人のような笑みを浮かべていた。これ以上の恍惚とした瞬間をのちの生涯で迎えることはもうないだろうという確信が僕にはあったのだ。それほど素晴らしい眺めだった。もしも今自分が世界の始まりに立ち会っているのだと聞かされたら僕はそれをそのまま事実として受け入れたであろうと思う。神秘的な何かの力を感じ、奇蹟の存在を盲目的に信じた。手足が計ったように震えだし、僕は戯曲的に膝からくず折れて大地と口づけを交わした。ちょうど「カラマーゾフの兄弟」にしばしば登場する、心から神を信じるものたちのように。やがて震えは増大し、熱を持った激情が目のふちから絶え間なく零れだした。僕はモンゴルの大平原で声を上げながら泣いた。

だが夢はそれだけで終わらなかった。ふいに顔を上げると、蟻のように黒い点がずつと地平線上に並び、なにかの合図を思わせる乾いた銃声がどこからともなく朗々と大地に響き渡った。そしてどういうわけか点は瞬きもしないあいだにぐつと僕に近寄って来ていた。それは戦車や銃を持ったソビエト兵たちだった。見るやいなや僕の理性は凍りつき、次の瞬間にはバラバラに砕けて白い錯乱の中

に落ちていった。銃弾が僕の膝をかすめたとき、本能が僕を動かした。僕は身を翻しつつあわてて立ち上がり、彼らとは反対に向かつて全速力で駆け出した。走って走って走り続けるあいだも爆撃が鼓膜を震わせ、ひいては大地を震わせた。肺が破裂してしまいそうになりながらも、一度も振り返ることはしなかった。やがて銃声は聞こえなくなり、地鳴りのような戦車のキャタピラの音もなくなった。僕は岩陰に手について倒れ込み、恐怖からしばらくそこで喘ぐように泣いた。しかし次に顔を上げたとき、そこにあった光景はおよそ信じられないものだった。岩の上には僕の大切な人たち全てがそこに並んでいた。父、妹、母、叔父、義弘、梓——彼らは全員が目を見開いて僕を見つめていた。そしてそれらは例外なく全て生首だった。僕は息をつけなかった。彼らの目に段々と軽蔑の色が浮かび、それがはつきりと表情にあらわれるのが見て取れた。僕は裏切ったのだ。自分の命と引き換えに、大切な人々を全て犠牲にしたのだ。しばらくのあいだ一枚の写真のように時間が止まり、そのあいだも首はじつと僕を見つめていた。それは夢の中で永遠にも思える長い時間だった。

第四章 「夢のあと、現実の証左」

ベッドから起き上がった。僕はしばらくそれが夢だとは信じられなかった。夢は普段のそれと比べてあまりにも生々しかった。もちろん現実味のある夢をそう見ないというわけでもない。むしろ奇妙な夢を見ることの方が多くくらいである。けれどそういった夢を見るたびにだが、僕はここがれっきとした現実である証左を、現実のよりどころを追い求めずにはいられなくなる。なぜなら僕はモンゴルの大地の匂いも覚えていたし、自分が踏みしめたみすばらしい草の感触も覚えていた。膝をかすめた銃弾の痛みも、首だけになった人々の表情も克明に。

僕はぶるつと身震いした。そしてあたかも薄氷を踏むがごとくおそるおそる部屋を出て（そうしなければ今ある世界はあとかたもなく壊れてしまう）、はやる気持ちで一階に下りた。なによりひとりでいるのが耐えられなかった。

僕がおぼつかない足取りで階段を下りていると、一階から妹の声が聴こえた。

「誰？ 圭ちゃん？」

僕は壁につき、熱病やみのような声にならない唸り声を上げた。

「お兄ちゃん？」妹は一階の戸口から床に手について顔をのぞかせた。「何やってるの、そんなところで」

「ちよつと牛乳取って」

「具合悪いの？ 夏風邪？」

「お願い。牛乳」

妹は身軽に立ち上がり、冷蔵庫から紙パックの牛乳を取って僕に手渡した。僕は震える手で底を掴み、口の端にだらとこぼしながらも勢いよく牛乳を飲んだ。

「汚いなあ、もう」

「今何時？」僕は口の端をぬぐって妹に訊いた。

「下りて来て自分で見て」

僕は動悸を抑えられぬまま一階に下りた。炊飯器の時計は八時三十二分を示していた。

「それちよつとずれてるかも」妹は棚の上に乗った青い目覚まし時計に目をやった。「今はね、九時五分くらい」

僕は大きく深呼吸をしてテーブルに手をつき、胡坐を掻いて妹の横に座った。

「昨日何時に帰ってきたの？」と妹は言った。そのとき僕の目は先刻の狂気を宿していたに違いない。妹の声は尻すばみに小さくなり、語尾が頼りなく響いた。

「夕方だよ」と僕は言った。「コーヒー沸かして」

「え？」

「コーヒーを入れて」

妹は膝に手をつけて立ち上がると皿に載った食べかけのハムエッグを躊躇なくごみ箱に捨て、しばらく僕に背を向けながら無言でカップに粉を注ぎ、水を入れたやかんを火にかけた。それから歌を口ずさむくらいの声量で「コーヒーじゃなくてお湯でしょ、沸かすのは」と言った。その言葉は午後までのあいだしばらく僕の頭の片隅に残っていた。

二口くらい口をつけてからカップを手には部屋へと戻り、僕はベッドの上でたった今長い旅を終えた人のように放心し切り、それまで目にした光景に深く囚われていた。なんという夢を見たものだろうか。僕は自分の両の手の平を眺めながら、それを閉じたり開いたりしてここが現実であることをふたたび確かめた。小指が引きつったように微かに震え、夢の情景が思い浮かぶとまた鼓動が早まった。僕は両手を顔に押しつけ、こめかみを指の先でぐりぐりと押し、目をぎゅっと絞った。それでいくらか気分はよくなかった。それからも僕は意識をどこか別のところに移すべくなんやかやと試み

てはみたものの、やはりそれはどれもうまくいかなかった。たぶんこれから二・三日のあいだ例の夢が頭から離れることはないだろうなという感じが明瞭にあった。おかげで数分に一度ははっと我に返り、ベッドから身を起こさなければならなかった。

昼前になると妹と父親はどこかに出かけてしまっていた。僕が家を出てから飼いだめたのか、隣家からは聴きなれない鳥の鳴き声が昼のあいだに三度ばかり耳に届いた。種類についてはその手の知識がないので皆目見当がつかないが、少なからずどこかで耳にしたことのある鳴き声だった。どこか夏を思わせる鳴き声だ。

午後になって母が階段を上る音が聴こえると、僕は自分からドアを開けてなんの用か訪ねた。

「今日はどこか出かけるの？ どこも行かないんでしょう」母はちよつと立ち寄っただけだというようなわざとらしい身振りで僕に訊いた。

「どこにも行かないよ。気分が悪いから」

「なに、風邪でも引いた？」

僕は力なく首を振った。

「髪切りなさいよ。そんなに長くて」

「うん」と唸るように僕は言った。

「じゃあちよつと下おりてきて」と母は急にせつかちになって言った。くるりと向きを変え、廊下を進んでいく。「物騒だから鍵かけといて欲しいの。お母さんも出かけちゃうから」

「どこに？」と僕は顔を上げた。

「お買い物。—— なにか食べたいものある？」

「じゃあカレーがいい。ナンも買って来て」

「はいはい」

「わかるの？」と僕は言った。「ナンだよ？」

しかし母はもう階段の下に消えてしまっていた。

「早く下りて来て」とそのあとでくぐもった母の声が聴こえた。

「もう本当に出るんだから」

僕は長く伸びた前髪を手で後ろにひつつめ、素足のまま廊下に出た。他人のものを扱うように片足ずつ慎重に階段を下っていき、母が出たあとで玄関の鍵を閉めた。そのあとしばらく動けずに玄関口で座り込んでいると、退屈で憂鬱な午後が始まったのだという経験的な確信が身をいつそうと気だるく、主に不分明な頭に重く圧し掛かってきた。ためしに一度玄関を開けて首を覗かせてみたのだが、近所のガレージに人影が見え、それがこちらに振り返る仕草を見せるや否や面倒になってとっさにドアを閉めてしまった。その人物は僕の三つか四つ年下の男の子の父親だったと思うが、やけにスキップの多い大柄な男で、当時からよく「やあやあ坊ちゃん！」とかそれらしいことを言って分厚い手の平を僕の肩にぴしゃりと叩きつけた。僕はふたたび床に座り、そのあとで有意義に今日を過ごす人々を想って彼らをひどく羨んだ。長らく身を置いた土地というのは、かつてその地にいた人間を強く惹きつけながらも、同時に確固たる期待はすれや墮落といったものを提供してくれる。それでとうとう誰しもが物憂げな気分になってしまふわけだ。

第四章 「意外な結末、老人の死、避暑」

それから僕は本日何度目かの前後不覚に陥った。気が朦朧としていたに違いない、自分が居間と台所のあいだに立っていることに気がつくことすら数分を要したのだから。郵便配達のパイクが玄関前に騒々しく停車し、我に返った僕は居間の座布団に腰を下ろした。ほどなくしてテレビを点けてみたのだが、画面で今なにが囁かれているのかまったくわからなかった。僕の意識にあるのは昨夜の夢が残した相変わらぬ胸の虚空だけであり、それはどこかの山奥で、瓦礫に出入り口をふさがれながら人知れず時を刻む防空壕を思わせた。そこでは時おり粉塵がぱらぱらと降り注ぎ、一日に数分のあいだだけ一筋の光が、手が届かないとわかりながらもわずかな希望が顔を覗かせるのだ。

テレビを消してしまうと部屋はしんと静まり返った。例の鳥がふたたび鳴き始め、国道の方から聞きなれた間断ないトラックの走行音が轟いた。部屋を閉め切って冷房をつけると、僕は膝を両腕で囲み、体を前後に揺すりながら歌を歌った。眉間をぱりぱりと搔いて顔を上げると、小窓のカーテンに隣家の庭木が影を落としているのが見えた。たぶん僕はその歌を最初から最後まで通して歌うことができるのだが、曲名を思い出すことができなかった。歌はしばしば続きを探し求めるように途切れた。曖昧ながらも最後まで歌いきると、僕は立ち上がってささくれだった電話帳を手には夕行を追った。

竹中勉 0 2 6 | 2 3 × | × × × ×

僕は番号を押した。

「はいもしもし」出たのは上品な口ぶりの女性だった。「竹中ですが」

「もしもし宮野ですけど」

「あら、ノボルさん？」

「いや、ノボルの息子の圭吾です」

「あつ、圭ちゃん？」とびっくりしたように夫人は言った。その声にはほとんど感動すらこめられていた。「声がそっくりだからお父さんかと思っちゃった」

「ハハ、お久しぶりです。——勉叔父さんはご在宅でしょうか」

「ご在宅でしょうか、なんてまあ！ほんとに立派。声が大人びたつてことはまた背が伸びたんじゃなあいい、違う？」

「もうあんまり伸びません」と僕は苦笑した。

「あらそう。もう二十歳になった？ ああ、なつてないんだ。——叔父さんに用があるんだつけ。ちよつと待つてね」奥さんは言い、おそらく階段に向かって怒鳴った。「あなた降りてきて。大事な人から電話。——誰つて圭ちゃんよう！ ほら早く」

そのあとで叔父の返答が電話越しに聞こえた。夫人は僕に誘いかけるようにくすくすと笑った。

「また今度おうちに遊びにきてよ」とおまけのように夫人は言った。

はい近いうちに、と僕は答えた。

「もしもし」と叔父はあわてた様子で夫人と代わった。

「お久しぶりです」

「久しぶりだなあ」まるで僕をその場で目にしているかのような口ぶりだった。「どうだい、あれから学校はうまくいつてんの？」

「そうですね——なんとか」

ジッポライターの金属音が二度ばかり耳に響いた。目をつぶつて意識を集中すると、広いリビングに立つて煙草をくゆらせる叔父の姿が鮮明に浮かび上がってきた。

「東大生だもんな。ハハ、兄貴よりよっぽどしつかりしてらあ」

「はい？」

「しつかりしてるって言ったんだよ。——それでどした、何かあったの？」

「実はどうしても訊きたいことがあつて電話したんです」

「いいよ。遠慮せずに何でも訊いてよ」

「本田さんのことなんですけど」と僕は言った。「まだ元気にしてるのかな、と思つて」

「ああ……」と神妙な声で叔父はつぶやいた。「本田さんなら今年の初めに心臓発作で亡くなつたよ」

僕はしばし受話器を持ったまま押し黙つてしまった。あたかも当然のことように、そんな結末をまったく予期していなかったのだ。

「うん」と事実を裏づけるように叔父は低くうなづいた。「でもそれほど苦しまずに逝けたらしい。遺骨はうちで引き取った。葬式もやったよ。墓もそんな立派なもんじゃねえが、うちの近所に立つてる。まあ線香をあげにくのは俺ぐらいのもんだけどね。圭ちゃんにも知らせようとは思つたんだが……時期が時期だろう、なにせ一月だつたから」

思いがけない感傷が胸を震わせていた。それからしばらく黙つていたが、決意を込めて口を開いた。

「僕も線香をあげに行つていいですか？」

「もちろん。もちろんだとも」といつになく厳肅な声で叔父は言った。「本田さんだつて圭ちゃんが来てくれたらそりゃあ喜ぶだろうよ。圭ちゃんと会つたあと本田さんはそのときのことばかり話してたんだからさ」

「本田さんが、僕のことを？」と確かめるように僕は言った。

「うん。そうだよ。まあ本田さんは何遍説明しても圭ちゃんのことを俺の息子だと勘違いしてたんだがね、『あんたんとこの坊ちゃんはあるやでかいな。あんな男はなかなかあらん』なんて言つてたよ。いや、本当にね」叔父は話を転じるように長く息をついた。「それにひとつ預かつてる遺品があるんだ。それは俺が持つてるより圭ちゃんが持つてた方がいいんじゃないかと思つよ」

「遺品ですか」

「うん。まあでもそれはこっちに来てもらつてから話そうか。そ

うだね。——今夏休みだろう？ 金はこっちで都合つけるから、来れるんならおいでよ」

「そんな」と僕はとっさに言った。「そこまでご面倒かけるわけにはいきませんよ」

「なーになに、いいのいいの。たかが電車賃かそこらだ。兄貴の息子にこづかいのひとつふたつ持たせられないようじゃ俺も終わるだよ」

「でもいつもいつもお世話になってますし……」

「だーいじょうぶだから。気持ちよく受け取ってもらえりやこつちも嬉しいんだ。ハハハ。兄貴のてまえ顔も立たねえしな。あとでお金は上げるから遠慮なくいちばんいい席で贅沢して来な」

僕は深く礼を言った。なるべく恐縮し切らないようにしたかったのだが（なぜなら時として申し訳ないという気持ち先立つことにより却って他人をがっかりさせてしまうことがある）、これまでの恩恵を考えるとそうもいかなかった。僕のようなせこましい人間にとってはということだが、叔父の寛大さはいつもありがたいことにはありがたいのだけれど、それに対してどんな代価を支払えばいいのかと常に頭を悩ませてしまうことにもなる。だから叔父にそんな気がなくとも、ついこつちで期待に背くことは許されんだぞという気になって、へどもどしてしまうのだ。

「ハハハ、何もそんなにかしこまらなくたっていいさ。それでいつ来れるんだ？ 大学の休みつたら長いだろう。中だるみしちゃうよな」

「すぐにでも行けます」と熱のこもった調子で僕は言った。「明日にでも明後日にでも」

「うん。圭ちゃんの都合がいい日ならいつでもいいよ。なんたつてこつちは気楽な自営業だからね」

電話を切ると僕は長い息をついて台所のシンクを背もたれに床へと座り込んだ。それで不思議と肩の荷が降りたような気になった。口元がほころび、そのあいだ絶え間ない空想が花開いた。老人の死

に携わる感傷も、今は高原の魅惑的な風景と取って代わっていた。
僕は壁の一点を見つめながら、次のような要を得ないことをもそもぞとつぶやいた。

着替え……写真……夏休みだから……お金と本に……着替えは……

そんなことをしているうちにふたたび電話が鳴った。僕はまさに飛び上がって受話器を手にしたのだが、それは次の選挙がどうたらこうたらという類の電話だったので、今は頼まれて留守番をしている身だからとか適当な返事をして電話を切ってしまった。相手も無駄とわかってすぐに諦めた。僕は四列に並んだ電話機の番号を見つめながら、いつそ今の気分にかかせて義弘に電話をかけてみてはどうかと考え始めた。久しぶりに遠くの叔父と会話したことで、度胸みたいなものが備わっていたわけだ。でも結局電話はしなかった。居間と階段のあいだをぐずぐずしているうちに元のような逡巡をどこかに感じてしまったから。あるいは理由づけみたいなものとしてそれを待っていたのかもしれないけれど。

第五章 「新幹線、ミステリー小説、カレーとの奇妙な縁」

次の太陽が昇るまでに長い夜があった。僕が叔父の家に遊びに行くということを母に切り出してから、思いもよらず僕を議題の中心とした家族会議のようなものに発展してしまったわけだ。「例えば将来のことについて」という名目から始まり、取るに足らない昔話、父親からの受け売りじみた教訓の数々や母の瑣末な心配事、そういった半ば食傷気味のやり取りがあった後でようやく僕は解放された。夕食に出てきたのはやはりただのカレーであり、会議に実のあるところはほとんど見受けられなかったのだけでも。

正午前、移り変わる窓の景色を眺めながら、僕は今年の夏にいたい自分が何度電車に乗ることになるのだろうかと考えていた。僕は昨夜のうちに荷物をまとめ、朝の十時に家を出て電車を乗り継いで東京駅まで行き、長野行きの新幹線「あさま」に乗った。腕には大学の入学祝いに叔父からもらったオメガ・レイルマスターをはめていた。今までなんとなく身に余るような気がして、入学式以来しかるべきときのため父親の金庫にしまっておいたものをひっぱりだしてきたのだ。

おそらく向こうに着くのは一時かそこいらになりそうだった。僕はキオスクで手ごろなミステリー小説を買ひ、移動中はずっと静かにそれを読んでいた。車両はまさに観光シーズン真っ只中というところもあって大いに賑わっていたのだが、幸運にも僕の隣には誰も腰を下ろさなかった。発車して十五分も経つとカートを押した女性がやってきたので、僕は夏野菜のカレーとコカ・コーラを買った。特にカレーを口にしたい気分でもなかったけれど（なにせ昨夜も食べたのだ）、無闇に腹を空かした子供たちが後ろできやあきやあ騒ぐのでつい焦って手に取ってしまったわけだ。それに選択の自由を与えられた場合なんかには、僕は習慣で物を選んでしまうケースが多々ある。どうやら今夏はカレーと奇妙な縁にあるようでもあったし。

小説を半ば読み進めたところに、自分が読書に没頭できていないことに気がついた。僕は義弘のことを考えていた。窓の景色はでこぼこした灰色のビル街から段々と深い緑や平べったい屋根の集落に姿を変え、自分は今なにか意味を持つてどこかに向かっているのだとかすかに息弾ませることができた。僕は後ろの座席に人がいないことを確認してからシートをいっぱい倒し、ごそそと体勢を整えながら目をつむって両手を胸の上に置いた。日よけを下ろし、リバーティーンズの「タイム・フォー・ヒーローズ」を気に障らない程度の音量で聴いた。そうしてしばらくじっとしていたあとで、ふいに義弘の顔が暗闇の中に浮かんできた。あの夢のようにはつきりと。僕はこれまで義弘の顔をなかなか思い出すことができなかったのだ。顔の特徴は浮かぶのだがどうしても他の箇所が像を結ばなかった。僕は肩耳のイヤホンを指で弾き飛ばし、目を開けてそのイメージをできるだけ長い時間保とうと努めた。でも次の瞬間にはイメージはほころび、最後には手にとることもできないほどぼんやりとした像に変わってしまった。

高校二年の冬ごろだったと記憶しているが、我々の関係がわずかながら希薄になっていった時期があった。考えてもみれば当然のことだが、その年頃というのはちょっとした啓発のようなものを与えるだけで十年保持した主張をがらりと変えてしまうことのできる年代である。これが大人ならそうはいくまい。ここまで関係を続けることができたのはある意味で奇蹟にも近かったのだな、と僕が感じたのはこのときであり、しかしすんなりと終わってしまうことにもとりたてて寂しさを感じなかった。つまり、かくいう僕自身も十代の好奇心が生み出すからくりにまんまと騙され、自らも機会あらばトリックスターの役割を担おうとしていたわけである。少なくともその覚悟はあった。

そのときの状況を整理してみるとこういうことになる。僕はそのころ再燃した執筆熱に駆られ、自分と同じような志しを持つ人間と

小説を書いていた。ありていに言えばそれは一時のことだけで、ほどなく熱は冷えてしまったわけだが。梓はと言うと、一年半のあいだで周りとすっかり交友を深め、気心の知れ合う仲間たちに誘われバドミントン部の練習にしばしば顔を出すようになっていた。義弘だけは前々から、僕のよく知らない人たちとよくわからない会話をしていた。

こうして思い起こしてみると、それぞれがあの幼少期から自立したように見えなくもない。だが実際にはそれぞれの中で食い違いたいなものが発生し、ひとまず保留するあいだに着々と育っていたわけだ。原因は義弘にあったように思う。あのとき少なからず義弘は僕らをがっかりさせた。人と人とがたとえ真に理解し合うことができないにしても、目に見える不足は補えるはずだという淡い願望を彼は打ちのめしてしまったのだから。

第五章 「ナスカの地上絵、義弘の告白、雪の公園」

あるときに一本の電話が義弘から掛かってきた。彼はむしろ陽気なくらいで、できたら近くの公園に来てくれないかと僕を誘った。すぐに行くよと僕は言った。数年ぶりに雪と呼べる雪が降ったその翌日のことである。柵を乗り越えて園内に入ると、ポケットに両手をつ突っ込んだまま無我夢中で意味のわからないステップを踏む彼の姿が見えた。僕はそれを見てほとんど吹き出しそうになってしまったのだけれど、ほどなくしてそれが雪の上に文字を書いているのだということに気づいた。

「なにを書いているの？」僕は立ち止まって言った。

「うん？」彼は悦に入ったような笑みを浮かべながら僕に一瞥を配した。「ナスカの地上絵」

たしかにそれはナスカの地上絵に描かれたいくつかの生き物たちに見えた。僕は彼のカンバスに足を踏み入れないよう気を使いながら、その周りをぐるぐると歩き回って仔細に絵を眺めた。どうやら少し前からこの場所に義弘はいたらしい。

「これは？」僕はポケットから手をだしてひとつを指差した。

「それはハチドリ」

「あの有名な？」

義弘は絵筆を止め、僕の言葉の意味合いを考えながら顔を上げた。「下手なのはしょうがないよ。雪だもの」と彼は苦々しく笑った。それから不思議なことにこう言った。「ごめんね」

それは一瞬、すれ違っていた時間が僕と義弘の関係になにか好ましい変化をもたらしたように見えた。僕はそのいくぶん感傷的な台詞に対し呆気にとられて佇んでいたのだが、彼の右足が再度雪を掻き始めるのを見て、すぐに戻るからと言い残し、熱いコーヒを二本ばかり買いに走った。

戻ってきたとき、義弘はかぶっていたニット帽を脱ぎ、額の汗を

拭っていた。僕はこれでよかったかなという風に缶の背をのぞいてから彼に手渡した。

「ありがとう」義弘は気さくに礼を言った。

「いいよ。向こうのベンチに座らない？」

我々は庇のあるベンチに座って、缶コーヒーを飲んだ。義弘の方を振り返ったとき、彼の靴の踵で雪の結晶が陽にまぶしく煌いた。そのときになって初めて、なにかこれまでの両者の溝を埋められはしないにせよ、それほど深刻なものではなかったのだと思わせるような気の利いた台詞はないかと考えた。

「今日はどうして？」と僕は切り出した。そのあとで小鼻をぴくぴく動かした。「なんかこの公園臭いな」

「そう？ 全然臭わない」

「いつも臭い靴下を履いてるから？」

果たしてこの言葉に効き目があった。義弘は笑い、僕も笑った。

「いや、最近あんまり話してなかったからさ」あからさまに先ほどよりくだけた調子で義弘は言った。彼は僕の目を見ると気恥ずかしさを押し隠すように口元をもごもごさせた。「ちよつと報告もあつたし」

「どんな報告？」

彼は言いよどんだ。せつかくの雰囲気だったので、僕はもう少し義弘と他愛ない話をしてもいい気になっていた。それで近況について尋ねた。

「あの人たちは誰？」

「あの人たち……」

「ほらいつも学校でいつしよにいる――」

「先輩だよ、あれは」

「部活かなにかの？」

彼は首を振った。「もうサッカー部の連中とは付き合っていないよ。やめてから一年も経つし。あの人たちとはちよつとした……」義弘は靴についた泥を手で払い、微かに笑い声を漏らした。後から考え

るに、それは希望に満ちたものだつたに違いない。「今新しいことをやってるんだ。誰もやったことのない新しいことだよ」

僕は微笑んだ。精一杯彼を肯定してやりたい気分だったから。

「雪はたまに降るといいね。静かだし」と公園を見渡して彼は言った。「雨の日は頭痛がするから嫌なんだけど」

僕は氷と名のつくものに対してはほとんど神経症的な拒否反応を起こす性質のだけれど、それはここで口にされるべきことではなかった。だから手近な雪をひとつかみして、硬く丸めてからシーソーに向かって放り投げた。雪はやわい音を立てて容易に崩れた。

「そのうち紹介するよ。悪くない人たちだから」

僕は肯いた。

「断っておくけど、心配してたわけじゃないんだよ。なんていうか、ただ——」

「おれがいなくて寂しかった、とか？」と彼は冗談めかして言った。

「それもあつた」と少し迷ってから僕は正直に答えた。「実はこのごろあんまり梓とも話してないから」

「おれもだよ」

そのとき、彼と僕のあいだでなにかが通じ合つた。寒風が野ざらしになったシーソーを軋ませ、冷気が顔を刺した。

「少し語ろうか」と彼は自分の顔を手の平でもみしだいた。「たまにはこういうのも、ね」

義弘は僕の話に耳をかたむけた。

「今まで三人がいつしよにすぎたっていうせいもあつたのかわからないけど、最近まで特にそのことを気にしたりもしなかった。だって幼なじみの結束はそんな簡単に破られはしないって思ってたから。でも僕たちはいま最も変わりやすい時期を迎えてる。なんていうか、これは寓話なんかじゃなくて——どう言ったらいいかわからないけど——」

「言いたいことはわかるよ」

「いま義弘に会って、僕にとってどれだけ二人が大切な存在か再確認できた気がする。これは嘘じゃなく。だからこのままじゃいけないって思ってる」そこまで話し終えて、僕は突然なにかが喉につかえたような状態になってしまった。あまりにも臆面なく自分の気持ちを正直に告白しすぎたせいで、その反動からしばしの放心状態に陥ってしまった。「言っておくけど、こんなことを話すのは相手が義弘だからであって——」

「わかってるよ」と彼は笑いもせず僕の逃げ口上を制した。「普通に話しなよ。別に恥ずかしいことじゃないんだから」

「それはわかってる」と言い、僕は唾を飲み下した。緊張のせい、図らずも真面目くさった物言いになった。

「でもこれからはお互いに寂しくなるかもしれない」
「どうして」

「今ほどは会えなくなる」と彼は言い、立ち上がったのびをした。
「おれは二人と同じ大学には行かないから」

義弘は巧妙に僕からの視線を避けた。手に持った空き缶を意味なくひととおり眺め、くず箱までわざとのろろ歩いた。僕は立ち上がった。

「それについてなにか理由があるの？」
彼はため息をついて首を振った。「よくないことだから——そう、というからおれは駄目なんだ」

「意味がわからないんだけど」

「はつきり言うけど」彼は僕に背を向けたまま、なんとも形容しがたい手持ち無沙汰な格好で言った。「おれは梓のことが好きなんだよ。もう知ってるとは思うけど」

僕は押し黙った。

「ずっと君のことが嫌いだった」義弘は覚悟を決めたように振り返り、僕の目をまっすぐに見据えた。「いつも卑怯者だと思ってた。なんとか梓と二人きりになろうと思って、おかしいことにちよつとすると君が現れる」

「それは――」

「わかってるよ。おれだってちゃんと聞いたんだから、最後まで話させてくれ」

僕は肯いた。「でもはつきり言ってくれて感謝してる」とだけ僕は言ったが、居心地は悪かった。

「どうしてなんだろうとずっと思ってた」と彼は続けた。自嘲するような笑みが口元に浮かんではいたが、彼の口調は真剣だった。「それで眠れない夜だっていっぱいあった。おれにはあの子の考へてることが未だによくわからないんだよ」

「でも、だからこそ惹きつけられる」

彼は肯いた。「長いあいだ、本当に長いあいだ苦しんだ。梓はおれの中でずつと神聖な存在だった。でももう疲れたんだ。このままじゃきつとおれは駄目になる」

夜のあいだに積もった雪が時間をかけてぐずぐずと溶けだし、今ではべちゃべちゃという足音をともなうて靴下を湿らせていた。近所から布団を叩くぱたぱたという音が響くと、猫たちが勢いよく路地を飛び出した。それを期に僕はふたたびベンチに腰を下ろした。彼にどんな言葉を掛けていいのかもよくわからなかった。

「これは逃げてるってことになるのかな」と彼は先ほどまでとは打って変わって、不思議そうな顔を僕に向けた。おそらく真剣にそう考えたのだろう。

「ちがう」と僕は言ったが、根拠のようなものはなにもなかった。「とにかく、おれの話はこれで終わった」義弘はそう言ってく僕に笑顔を見せた。「心変わりしないうちに言えてよかったよ。これでもう引き下がれない」

僕は精一杯の笑顔を作った。「進路は？」

「まだわからない。でもそれほど時間はないし、一ヶ月先にはあつさり決まってるかもしれない」

「応援するよ」と僕は言った。

「賛同に感謝する」彼は真剣にその言葉を放ったらしかった。な

にか続くと思っていたのだが、それきり話題は別の方向に転じてしまったから。

公園を通り過ぎるさい、近所の子供たちが名残惜しそうに雪を眺めていった。ひとりのいかにもいたずら好きな少年がシャーベットのようになつた雪を手の平で丸め、電線のカラスに向かって投じる。僕はそのとき自らの過ぎた幼少時代を思った。子供のころ、誰しもが自分は年老いないと信じていた。老いた自分を想像して母に泣きついたことさえあった。僕はその場で静かに目をつむり、義弘になにか話しかけられるまでそうしていようと決めた。なにかを始めるのに手遅れなことなんてない。

「気楽にやろう。まだまだ先は長い」

僕らは立ち上がり、手と手を打ち合わすように握手した。夕陽が家々の屋根を焼く帰り道、僕はその年の夏に会った本田という老人のことを思い出していた。

第五章 「重なる情景、長野にて」

そのあと彼は僕に言ったとおり、東京大学への進学を様々な人間から推し進められたが断固として首を振り、杉並区にある大学に進学した。梓はどうしてなのかとしつこく義弘を問い詰めたが、義弘はそのたびに勉強と距離を置きたいからだと言った。そのときの彼はもう吹っ切れているようでもあった。僕は義弘と会って話したことを誰にも言わなかった。たぶん義弘も言わなかっただろうと思う。

目を開けたとき、腕時計の針は四十分進んでいた。新幹線はおそらく山梨のどこかを走っていた。僕は日よけを上げて景色を眺めたが、太陽はずっと真上に昇り、新幹線の窓からはもう見えなかった。僕は座席の上で大きくのびをして一度立ち上がり、体とずれた服の帳尻をきちんとあわせた。そして本を開き、また続きを読んだ。正午近くのことだった。

長野駅に着くと、いつもとは違う風が僕の体を撫でた。それは高原の匂いであり、同時に冒険心を含んだ別の土地の匂いだった。少し肌寒かったので僕はＴシャツの上にボタンドアウンのシャツを羽織り、叔父さんの家に電話をした。着いたことを知らせると叔父はすぐに家を出ると行った。

「どこか適当にそこらをぶらついてみてもいいよ。そのかわり三十分後には駅にいてくれな」

僕は荷物を肩にしょいなおし、目をつぶってもう一度息を吸い込んでみた。駅の周辺は帰省の人々や旅行者で賑わっている。僕は通りを歩き、目についた喫茶店に入ってコーヒーを一杯頼んだ。タバコを吸いながらそれをゆっくりと味わい、僕は土地に身体を馴染ませようと努めた。自分の住んでいたところを離れると、そこに住んでいる人々の顔もまるで違って見えた。どうしてだろう、と僕は思った。みんながみんな幸せで、僕とは別の世界に住む人間みたい

見えるのだ。

コーヒーを飲み終わると僕は荷物の入ったボストンバッグを開け、中身をひとつひとつ確かめた。着替え（それは実家に置いてあったものだからろくなものじゃなかった）、歯ブラシ、携帯電話、読みかけの小説、ポラロイドカメラ。僕は時間を確認してからバッグの底に埋まった小説を取り出し、それをテーブルの上に重ねた。スコット・フィッツジェラルドの短編集、ヘミングウェイの「老人と海」、漱石の「こころ」。駅で買ったミステリー小説はそのまま新幹線の中においてきてしまった。僕は自分でもなぜ夏目漱石の「こころ」をバッグに入れたのかわからなかった。だがそれは旅に持っていかなければいけないような気がした。時として使命感とは複雑な心の中に生じるものである。もっと言えば、僕は「こころ」の呪縛がなにかのきっかけで解かれるのではないかと密かに期待していたのだ。

結局、短編集と「こころ」をバッグの中に戻し、ときどき腕時計で時間を確認しながらアーネスト・ヘミングウェイの「老人と海」を読んだ。本は過ぎた年月のせいで端が黄ばみ、使い込まれた歯ブラシのようになっていた。この小説は昔からよく頭をからっぽにしたいときだけ好んで読んだ。ヘミングウェイに限っては、僕はそれほど熱心な読み手というわけでもない。けれど彼の作品——特に本作品における著者の情景描写には、抗いがたい自然の力を生身で読み手に伝えるだけの技量が注がれている。それはページを捲るうち、僕にモンゴルの平原で見たあの一時の美しい朝日を思い出させた。

旅行者の群れがひとかたまり列車から吐き出され、地図の前でしばらくまごついたあと、思い思いの方向に散って行った。母親に手をひかれた少女が、ロートーンの窓越しから店内の白人観光客に向かって手を振った。叔父と再会するときが刻一刻とせまるにつれて、僕の胸は意味もなくはらはらした。一時半に勘定を払って店をあとにするまで、そのざわつきはずっと胸の中にあった。

見る見るうちに気温が上がり、もうシャツを着ている必要はなく

なった。駅前で十分近く待っていると、白のバンからピンクのポロ・シャツを着た血色のいい叔父が降りてきた。車体には黒々とした文字で>喫茶・砂時計<と書かれ、その上をアーチ型に>草原の癒し、味わいのひととき<と書かれている。

叔父は厄介なものでも見るような顔つきで観光客の集団を見やっただと、反対の方角に僕の姿を見つけ出した。表情がすぐと明るくなり、こちらに向かってせかすように手招きをする。僕が歩み寄るあいだに、彼は少し上体をかがめて煙草に火を点した。

「いよう、久しぶり！」叔父は勢いよく顔を上げると、煙草を左手に持ち替え、僕と握手した。

「お久しぶりです」

「ずっとここで待ってたの？」

「喫茶店にいました。その——」と言って僕はその方角に指を差そうと思ったのだが、見慣れない景色のせいで自分の来た方角どつちなのかわからなくなってしまった。「大体そこらへんの店だったと思うんですけど」

「またまた。ほんととは女の子に声でも掛けてたんじゃないの？」

とおどけた様子で彼は言い、煙といっしょに黄ばんだ歯を見せた。

「まさか」

「ジョウダン——まあ乗りなよ」彼は長年連れ添った恋人の肩に手をおくような仕草で車に手をかけると、僕に向かって助手席に座るよう顎先で指示した。「話は車の中でしょうさ。今日は暑いからね」

車内には半永久的に消えそうもない強烈な煙草の臭いが染みついていた。それは僕が子供のころから感じていた叔父のにおいとそっくり同じものだった。ドアーズの古いアルバムがかかり、灰皿はラークで一杯になっていた。バックミラーのところにペンギンのかたちをした臭い消しみたいなものがぶら下がっていたが、それほど効果はないらしい。そんな叔父にもかつては禁煙を決意した経緯があった。十七歳のとき少年鑑別所に入れられた一ヶ月と、奥さんが妊

娠した四年ほど前のこと。しかし叔父夫婦には今も子供はいない。
奥さんがその年の末に子供を流産してしまったからだ。二人が子供
をもつ作ろうとしていないのかどうかということまでは僕にわから
ない。

第五章 「気持ちのいい昼下がり、林道を抜けて集落へ」

車は街道を抜け、それから大通りに出て真っ直ぐに走った。叔父がハンドルをさばくたび、よく日焼けし、隆起した筋肉がポロ・シヤツの袖からのぞいた。

「でも向こうに比べたら涼しいだろう」車が長い直線に差し掛かったとき、叔父はこちらにぱつと顔を向けた。それから手でバックミラーの角度に修正を加えた。「東京の暑さはおれも経験したことがあるけどさ、ありやちよつと普通じゃないよ。そりゃ京都なんかもおそろしく暑いよ。でも東京の暑さはまた別物だ」

「わかるような気がします」

「あそこは大体人間が多すぎるんだよな……うち来る前になにか買つて行こうか。メシは家にあるけど。なにか必要なものある？」

「花火がやりたいですね、去年みた」

「……ああ、そっぴや去年もやったなあ」と叔父は言い、きれいに剃った自分の顎を撫でた。「よし、じゃあ花火も買つてくか」

我々はそろつて車を降り、ファミリーマートで花火とペットボトルのジュースを買った。勘定は叔父が払った。僕が財布をポケットから出そうとするその仕草だけで、叔父は僕の胸に手を置き、半ば押し飛ばすような感じで制止した。それで案の定、僕はレジの前でおろおろする結果に至ってしまった。彼は僕に対して父性的な存在であろうと常から努めていた。でもどういふわけかそれが僕を息苦しくさせてしまうのだ。

道の途中、僕は大学の競争的で半ば情性的な日常を吐露し、叔父は自分の気ままな暮らしぶりを楽しそうに話した。子供のころから彼と話をするたびに、胸に将来は田舎に住みたいという気持ちが募った。でもそれを口にするたび、叔父は気のない感じで「やめとけやめとけ」と受け流した。叔父はもちろん僕になにか伝えたかった

のだろうけれど、僕にまだそういう意味での想像力がいくぶん足りなかったせいもあるだろう、実際的な問題を彼の生活の中に見出すことができなかった（そして彼自身、どこかしら田舎者を嫌っている節があった）。

大きなスーパーマーケットのわきを通り過ぎ、林道へ入ると、姿のない鳥たちの鳴き声が頭上に降り注いだ。軽快に砂地を噛む車の上を、木の葉の影が休みなくその模様を変えながら踊った。気持ちのいい昼下がりだ。ときおりサイドミラーが鋭く光を反射し、ある地点に差し掛かったところでちかちかと絶え間なく光った。それが道の終わりを示すサインだった。気づくと我々は閑静な住宅街に、その完璧なまでに整地されたアスファルトの上を音もなく走っている。叔父の家は一年前となにも変わらないように見えた。張り出した一階のテラスからは束ねられた更紗柄のカーテンがのぞき、奥に広々としたダイニングが見える。大きな窓がいくつも配され、それにのっぺりとした銅色の屋根がふたをしている。隣家と見比べてみてもほとんど見分けがつかない。それが遠く山の麓まで続いているのだ。

叔父はぴったり車を青天井の車庫に止めると、一仕事終えたような顔をして煙草に火を点け、座席をいっぱい倒してのびをした。彼はしばらくのあいだ目をつぶってそうしていたのだが、突然はっとして飛び起き、亡霊でも目にしたような顔つきで僕を見た。

「いけねえ。いま何時？」

「三時十分」

「しまったな」と叔父は言い、考えあぐねるように間を置いた。

「だってケイちゃんお腹空かしてるもんな？」

「まだ平気ですよ。どうしたんですか？」

「ちよつと出ちゃってるんだよ、あいつがさ、女房が。まあいいか。どっちみち夕方になったら帰ってくるからそれまで……とにかく家の中で食いもん探そうか、ね？」

我々は荷物を持って家の中に入った。紛れもない木の香りが部

屋中に満ちていた。叔父はリビングのソファに僕を座らせると、自分もどつかと腰を下ろした。

「もてなすもんがなくてわりいね」と叔父は言い、頭のうしろの方を掻いた。「あいつもタイミングが悪いんだよ。最近じゃあ習い事にはまってるみたいでさ」

「習い事って?」

「手芸だよ。グラスに敷くコースターを作ったり、ぬいぐるみを作ったり……そうだよ、この前なんか粘土のフルーツ・パフェ作ってきやがってさ」

「へえ」と僕は感心して言った。

「なにがおもしろいんだかさっぱりわからんけどね」と叔父は呆れるように首をひねった。「そのうちペンションを始めようとかいいかねん勢いで……」

「いいですね、それ」

「ジョウダン」叔父はそう言うソファから腰を浮かせ、ダイニングに向かって歩きかけた。「お酒はまだ無理なんだっけ?」

「多少なら」

叔父は高らかな声で笑い、「男はそうでなくっちゃ」と上機嫌にくくった。

第六章 「叔父の口から語られる本田老人」

しばらくもしないうちに、叔父がダイニングから六本詰めの缶ビールと二つの空のグラスを手に戻ってきた。我々はビールの並々注がれたグラスを手に乾杯した。叔父はちよつとだけ口をつけると、あとはおもしろおかしく僕を見つめていた。甥の成長を目の当たりにすることで初めて、現実をより現実味のあるものとして捉えられたみたい。

「うまいか？」と彼はややあつて訊いた。

僕は肯いた。「本田さんなんですけど、叔父さんとはどんな風に出会ったんですか？」

「本田さんとおれ？」

僕はもういちど肯いた。「ずっと気になっていたんですよ。歳も離れてるし、住む場所も全然違う、本田さんには血縁もない——じゃあどうして知り合えたんだろう、と思って」

「本田さんはね」叔父はグラスの位置を直し、両膝に肘を置いて唇の前で手を組んだ。それは彼がなにか真剣な話をするときのちよつとした癖だった。「おれが二十五かそこいらのときに偶然会ったんだよ。まあ偶然と言ってもあれさ、おれが役所に勤めていたところだね……あのころは——」そこでいったん言葉を切り、叔父はビールを一口飲んだ。「ちよつと長くなっちゃうけどいいかな？」

かまわない、と僕は言った。家の中はしんと静まり返っていた。時おり庭にとまった雀たちが午後の平穏をさえずった。

「あのころは散々な状況を目の当たりにしたよ」と叔父はふたたび語りだした。「本田さんは生活保護を申請しに役所に来てたんだ。本人がそう望んだわけじゃなかったけど、気のいい隣人がいてね、その人が無理に連れてった。でも、そのころの役所は警察の天下りが激しい時期でさ、役所には生活保護課っていうのがあるんだけど、そこもそりゃあ元警察官の巣窟だった……で、そいつらがまず始め

になにをしたかっていうと、片っ端から生活保護を打ち切ったんだよ。いささかの躊躇もなく。予算内に収めるよう上から言われていたんだな。それで連中は給料に色をつけてもらえらってわけさ。ホームレスから職を失くした人まで片っ端から奈落の底に落とされた——いいかい、ホームレスだって条件に適えばちゃんとして保護を受けられるんだ」

僕は相槌を打ったが、その事柄についてはすでに認知していた。

「本田さんもその犠牲者の中のひとりだったってわけだ。本田さんは圭ちゃんも知ってるとおり、天涯孤独の身だろう？ 世の中でいちばん生活保護を必要としてる人間だ。けどあいつらは相手がその手のことに——つまり法律のことにくわしくないとわかってるものだから、でまかせ言っとうまく煙にまいちまうんだな。おれはもうさすがに見てられなかった。いちおう上司だし、ずっと年上だったんだけど、びしっと言ってやったね。そしたらなんと奴ら自分たちの正当性をおれに説いてきやがった。なにせ元警察官だからね、言いくるめるのがうまいうまい。おれもまだ若かったからゆずれなくってさ、しまいにはカツとなって、胸ぐら掴んでデスクに放り投げちまった……で、こうだ」

彼は水面からやつとこさ首を突き出したような顔をして、首を切られるポーズをしてみせた。

「あのときばかりはさすがにまいったね。まさかまさかの懲戒免職だ。停職までは覚悟してたが……でもまあそのあと本田さんが生活保護を受けられることになってほっとしたよ。同僚にいい子がいてさ、その子がなんとか本田さんの生活保護を受諾するように手を打ってくれたんだ」そのあとで叔父は恥じらいを隠すためか、ひときわ大きな声を放った。「そしてその子が今ではおれの女房ってわけだ！」

「いささか出来すぎた話ですね」

叔父は笑った。「そうだよな、本当にそうだ。それでよけいに俺たちは本田さんのことが放っておけなくなっただんだな、きつと。色

々なことを世話したよ。使わなくなつた家具、布団、住むところ。

まあそのほとんどを拒否されたけど。ほら、あの人は着の身着のままで生活するような人だろう？　せめてもう少しいい暮らしをさせてやりたかつたんだけど、本田さんはそれを拒んだ。他人の手ほどきは受けん、つてな具合にだ。でもまあ住居だけはどうしようもないってんで俺が役所の同僚に言つて手配させた。それがあの千葉の外房の家だな。ボランティアが世間に認知されてきたところだったからヘルパーの人もすぐについたよ。ラッキーだった」

叔父は一息にビールを飲み干し、僕もそれに続いた。

「だけど役人がそんなことをしてるだなんて全然——」

「なにも見るからに悪い人たちっていうんじゃないんだ」と彼は僕の言葉をさえぎつた。それから素早い手つきで煙草に火を点し、首を振つた。「全然そんなじゃない。普通の人たちだよ、いわゆるおれは思つただけだね、いったんそういうシステムの中に組み込まれちゃうと、善悪の判断なんてのは二次・三の次になつちまうんじゃないのかな。世の中の仕事なんて大体そうなんだ。それが当たり前。金をもらつてのはそういうことなんだよ、圭ちゃん。くれぐれも気をつけな」

時計の針が三時半を打つた。叔父は僕の腕時計にちらつと目を配つてから、「うん、よく似合ってる」と肯いた。

「たぶん圭ちゃんはおれと似たところがあるんだな」と叔父はだしぬけに告げた。「ふとしたときに本田さんが気にかかるんだろう？」

「どうしてわかつたんですか」

「圭ちゃんはまだあまり物事を考え込まずに直感で行動するタイプだ。いや、自分の感じたことを素直に信じるタイプだ。冷静そうな見た目とは裏腹にね。昨日今日本田さんが亡くなつたことを伝えたのに今じゃここにいる。普通の人はとりあえず考えるんだ。いつだつてとりあえずね。でも時間が経つにつれてその考えみたいなものは自然に古びていく——現実味を失つていくっていうかさ。そういうの

を圭ちゃんはちゃんとわかつてる。それに君はおれと違って忍耐力もある、ずつとね。辛抱強いだけにうまく事が運ばないこともあるんだろうが……本田さんの言っていたことがおれにも今わかるような気がするよ」

叔父の話しぶりには、いつの間にやら深い感傷が込められているように見えた。彼の話に聞き入りすぎてしまったせいもあって、僕はいつとき謙遜することすら忘れてしまった。

「そんな大仰というか、立派な人間じゃありませんよ、僕は。むしろなにごとにも必死なくらいで――」

「そういう必死さも含めて」と有無を言わさぬ感じで叔父は言った。そうか、酔いが回り始めているんだな、と僕は気づいた。彼の表情には、たまには甥をたっぷり褒めたってバチは当たらないだろうが、という微笑が浮かんでいた。

叔父は顔を赤くして立ち上がり、僕の肩を二度叩いた。それからごつごつした灰皿に煙草の先端を押し付けた。

「退屈しのぎになにかやろう」と彼は両手を胸の前で打った。「できれば勝負ごとがいいね」

第六章 「黄昏時、賑やかな晩餐」

五時少し前に、叔父の奥さんが食材のぎっしり詰まったビニール袋を手に帰って来た。その一時間ほど前に我々は微かな雷鳴の轟きを認めていたのだが、雨は多少のぱらつきを見せただけで、遠く山の向こうに去っていつてしまった。今ではまた燦然と輝く太陽が、落ち着かない雲の流れのあいだで、そろそろと西の方角に傾きつてもテラスに淡い光を射し込んでいた。叔父と僕は料理ができるまでのあいだも、勝ち負けに依存しないという条件つきで将棋に興じていた。僕は飛車に続き、彼の銀将も取った。桂馬はすべて僕の手元にあった。

「こいつは難儀だ」と彼は重々しく言い放った。それからダイニングに向かつてどなった。「コーヒーを持って来て、二杯分！コーヒーを二丁だよ、早く。酔いを覚まさなくっちゃ勝てそうにない」将棋は僅差で僕の勝ちだった。叔父が煙草に火を点け、なにか言いわけらしいものをももぞとつぶやきかけたときにちょうど料理ができあがった。「メシを食ったらもう一勝負しよう」と彼は言った。

叔父の奥さんはこと料理に関してはかなりの腕前と自信を持っていた。ひとりで暮らしている僕からすると、それは随分と豪勢な食事に見えた。とは言え自分と出会うまでは掛け値なしにひどい有様だった、というようなことを食事が運ばれてくるまでのあいだ叔父は何遍も繰り返した。「そんなにひどくない」というのが奥さんの言い分だったが、叔父は「なにを言うかね——食べられたもんじゃない」と強情に突っぱねた。

「じゃああなたは食べなければ？」と奥さんはいくらか機嫌を損ねたような調子で言った。「圭ちゃんはいくらでもあるから存分に食べてちょうだいね」

「昔の話だ。なにも今は不味いなんて——」

「今日は男の子が二人だから多めに作ったの」と奥さんは叔父の言葉をさえぎって皮肉っぽく告げ、ウインクの代わりに微笑を投げかけた。

茄子の入ったパスタグラタンにメキシカンサラダ、炙った鶏肉と青いふちの皿に盛られたトマトスープが食卓に並べられた。ものの十分もしないうちにそれらの料理を平らげると、満腹感と共に早くも眠気が襲ってきた。なんにせよ、カレーが出てこなかったことがなよりの救いだっただけ。それがどんな贅をこらした美味いカレーであつたとしても、さすがにもう食べ飽きてしまったから。

食後にコーヒーをどうかと尋ねられたので、いただくことにした。叔父はさつき飲んだからいらないと断ったあとで、リビングに置いた飲みかけのビールを取りに行った。奥さんは僕に、料理は口に合ったかと尋ねた。

「もちろん美味しかったですよ。なにせ半分はこのために来てるんですから」

「ありがとう」

「今度簡単な料理を教えてくださいませんか？ 手間のかからないやつ」「それなら――」と奥さんが言いかけたところで、リビングから大きな物音がした。叔父が灰皿を持ち運ぼうとして床に落としてしまったらしい。

「ねえ、ちゃんと片づけてから来てよ」と奥さんがどなった。「あと絶対にカーペットはこすらないでね」

「あとでやる」とリビングから声がした。

「もう。いつもああなの」と奥さんは僕に向かってこぼした。

叔父はビールを飲みながらリビングの戸口に立って、僕に手招きした。

「将棋はあとでいいじゃない」と奥さんが非難するように言った。「わたしだってせつかく圭ちゃんとお話できるんだから」

叔父はしぶしぶ元の席についた。テラスを濃い色の夕焼けが侵しはじめ、木目のついたプラスチックの椅子が反対の方角に向かって

長く影を落としていた。

「もしかしてまだお夕食には早かった？」と奥さんが僕に尋ねた。
「料理するのにもう少し時間がかかると思ってたから」

「夜にまたなにか食べればいいだろう」と叔父が請け負った。

「ちょうど叔父さんと僕はお腹を空かせてましたから」と言つて、僕は叔父の方に顔を向けた。

「ねえ、圭ちゃんおいしかったって」彼女は夫の方にはっと顔を向け、片方の眉を器用に吊り上げた。「あなたもなにか言っているんじゃない？」

「美味かった、美味しかった」と煙草を吸いながら、叔父は疲れたみたいに言った。「なあ、圭ちゃん？」

僕はにつこりと微笑んで肯いた。

「嬉しい」と彼女は笑顔を見せる。それから楽しげに告げた。「そう、いつそ今度お料理教室を開こうかとも思ってるの」

「まあた、なにを言い出すかと思えば……」

「ちよつと待つてよ。最後まで聞いて」諭すように夫の太もみに手を置き、奥さんはまたこちらに顔を向けた。「ここらへんの奥様方ってみんな退屈してるの。だからね——だから手芸教室の先生に、教室を開くのなんて簡単だからって勧められちゃって」

叔父は鼻を鳴らしてうさんくさそうな顔をした。

「いいですね。それでペンションでも始めたらきつと繁盛しますよ」

「やめとけやめとけ」と叔父は言った。「なんでも本気にしちゃうんだからさ」

「誰も本気になんかしてないでしょう？ 圭ちゃんだってほんの冗談で言ってるんだから。ねえ？」

「けどもし料理教室を始めるなら——」

「でもなあ、安易に商売なんてやるもんじゃないよ」と叔父がさえぎった。「世の中簡単そうな代物ほど難しいんだ」

僕と奥さんは料簡を誤ったような顔で互いを見合わせた。

「けど先月はよかつたって」

「調子は上向いてる——でも先のことはわかりやしない。こつこつやるのがいちばんなんだ」

叔父の口調にどこか有無を言わさぬ重苦しさがあつたせいか、それを潮に始めて沈黙のようなものが食卓に降りた。少しして奥さんは立ち上がり、料理の後片付けを始めた。僕も同じ大きさの皿をひとつに重ね、洗い場まで持っていった。

「ありがとう」と彼女は言い、排水溝に視線を落としたまま微笑を浮かべた。「わたしのことはいいから将棋してらっしゃい」

第六章 「嫉妬、花火、ポラロイドカメラ」

僕と叔父はリビングに移り、また元のように将棋盤を挟んで座った。でもさつきより真剣になることはできなかった。将棋を指しながら僕は梓と義弘のことを考えていた。辺りが静かすぎるせいだろう、ときおり誰かがそばで身を潜めているような感覚にはっとさせられることがあった。僕は叔父に頼んで煙草を一本ゆずってもらった。僕がフィルターを口にくわえると、彼は黙って火の点いたジッポ・ライターを差し出し、「ほどほどにな」と訓戒を授けた。そして小気味いい音を立てて蓋を閉め、ジッポ・ライターを煙草の上に重ねた。

それからもなんとか勝負に意識を集中しようと努力したのだが、大体において叔父が手を考えているうちに、また意識がよそへと移った。なぜ今になって義弘が突然、それも梓だけに限って声をかけたのか——それが僕をそわそわと落ち着かない気持ちにさせ、ときに激しく胸を揺すぶった。考えが進めば進むほど、居心地の悪さを乗り越え、今すぐにでも帰りたいという気になった。あるいはふと昔を思い出して電話をかけてみたただけなのかもしれない。なにかのきっかけで義弘の心境に変化があったのかもしれない。本心を打ち明け、過去の一切に終止符を打とうと考えたのかもしれない……際限なく想像が膨らむにつれ、嫉妬や焦りみたいなものが身に募り、はつきりと劣勢に立たされたそのときになるまで勝負に身を入れることができなかった。その後なんとか持ち返し、ぎりぎりのところで僕は彼の王将に手をかけた。

「あーあ、やっぱり東大生には勝てねえか」と叔父は肩を落とす、思い悩むように手を額にあてがった。

「まぐれですよ。たまたま」

「まぐれか——まぐれが通じるのは二度までだからな」と彼は自分に言い聞かすように言った。

夜には花火をした。近所迷惑になるからという理由で叔父の経営する喫茶店まで車で行き、厳肅さを増した夜の森を背景に三人揃ってしゃがみ込んだ。長くのびた道には深い闇が降り、先はほとんど見えない。花火の先端におそるおそる火が点され、初めひとつだった明かりが二つになり、やがて三つになった。同じように心音がひとつひとつ高められ、瞳に映じた光の分だけ好奇に満たされていく。色とりどりの短命な花が一斉に咲き乱れたがごとく、わっと盛り上がり、やがてある瞬間にふっと消える。しかし無明に耐えかねたようにふたたび点され、また消えていく——それが終わりまで三十分近く続いた。

そのとき、なんととはなしに僕は熱に浮かされたみたいになっていた。ある種のもどかしさと淡い感傷のあいだを行き来し、とにかくと火を点けられたように体の芯が熱くなった。背後の森に潜んだ姿のない演奏者が木琴を奏で、神秘に満ちた夜を眼前に生々しく描き出した。でもあるポイントを過ぎると、今度は突然に暗い気持ちに沈んでいった。多くを望みすぎ、それ以降の人生に深く失望してしまった少年のような気持ちに。そのせいだろう、場にしゃがみ込み、シャワーのような光を見つめることに没頭していて、地面を焦がしていることに気づきもしなかった。

僕はさっと立ち上がり、ズボンを払ってポラロイドカメラを手にした。

「こつちを向いて」と僕は声を張った。「二人とももう少し真ん中に——光を顔に近づけるような感じで——そうそう」

やがてバケツの中の燃えかすがいっぱいになり、最後に残しておいた線香花火をそれぞれが手にとった。頭上にはなににも代えがたい息を呑むまでの夜空があつた。震える火種が早々と地に落ちたとき、束の間後悔みたいなものが僕の胸をよぎった。

「帰ったら遺品を見せよう」と唐突に叔父は言った。「圭ちゃんがあれば見てどんな反応をするのかが楽しみだ」

「なにか変わったものなんですか？」と僕は訊いた。

「まああの人は普通のものは残さないよ」と叔父は意味ありげに言った。

車が発進してからしばらく、誰も口を利こうとしなかった——深い物思いに車がすっぽり包み込まれてしまったがごとく。最初に口を開いたのは叔父の奥さんだったが、間延びした沈黙を破れるかどうかという懸念から、彼女の声が微かに震えた。

「ところで、ねえ、圭ちゃん——こっちはいつまでの予定？」

僕はとくに意味なくバックミラーの叔父を一瞥し、それからまた前を見た。

「実は明日の夕方には帰ろうかと思ってるんですが」と僕は言った。

「えっ、明日帰っちゃうの？」

「どうして」と叔父が落ち着き払った声で言った。「なにかあるの？」

「それほど重大な用ってわけじゃないんです。でも、少し気にかかることがあって」

「残念」と奥さんは助手席から振り返り、僕の顔を気の毒そうに見つめた。「でもやつぱり、東大生ともなると忙しいもんね」

「彼女か？」と叔父が顔をにやつかせた。

「違いますよ。友達のことでちよつと——」

「でも女なんだろう？」

うまい逃げ道はないものかと考えているときに、気を利かせた奥さんが「ほら、あんまり詮索しちゃだめでしょ」と夫をたしなめた。でも叔父はついにそれと確信を持ってしまったような顔で声を上げて笑った。

「今度紹介してもらわなくっちゃな」と叔父は奥さんに向かって意味ありげな一瞥を配した。「若いぴちぴちした女の子をさ」

「大馬鹿」と奥さんは呆れたみたいに言った。「圭ちゃんからも言ってやって。いい歳なんだからもつとちゃんとした大人になん

さいって」それから少し迷って付け加えた。「せめて煙草くらいはやめるようにって。家中臭くって臭くって――」

「いいじゃねえか。一日一箱くらい」

「もつと吸ってると思う」と奥さんは譲らなかった。

「僕も人のことは言えませんか」

僕はそう言葉を濁したが、二人にとつては思つたより深刻な話題だつたのか、車内にふたたび沈黙が下りた。

「そうだ。叔父さんに聞きたいことがあつたんですよ」なにか別の話題はないものかと考えているちょうどそのとき、鳥の鳴き声について思い出した。「こういう風に鳴く鳥って知りません？ ピーピル、とかそんな風に」

「オオルリかな。わからんね」と叔父は真剣な口調で言つた。

「どこで聴いたの？」と奥さんが言つた。

「神奈川です。そんなに自然の多い場所じゃないんですけど」

「夏鳥じゃないのかな、たぶん」と叔父が自信なさげに言つた。

「家に図鑑があるから調べてみるといいよ。そら、もううちへ着くぞ」

第六章 「本田さんの遺したものの、大いなる夢の片鱗」

帰ってから半時間ばかり、三人で他愛ない世間話に興じた。ときたま叔父がばちんとライターを鳴らして、曲芸みたいなものを披露して見せた。奥さんからすれば「見飽きた」そうだが、僕はなかなか楽しませてもらった。何度か自分でも挑戦してみたけれど、叔父みたいにうまくはいかなかった。

奥さんが寝てしまったあとも、男には男同士でしかできない話があるからと、叔父は缶ビールを両手にテラスへ僕を誘った。辺りはすっかりと寝静まり、黒い固まりとなった山や林が四方を囲っている。解凍した枝豆を皿に盛って、僕は叔父のあとに続いた。叔父は慎重に家の中を見渡してから窓を閉め、缶ビールのふたを開けた。

「さあ、二回戦と行こうか。ハハハ」

その席で僕の話題が持ち出されることはほとんどなかった。てつきり>彼女<のことを根掘り葉掘り訊かれると思っていたのだが、まったくの杞憂に終わった。叔父はいまの奥さんと出会う前の恋愛体験やら、自身の経験した様々なトラブル、果てはセックスにおける相性うんぬんまで間断なく滑るように話した。これにはさすがの僕も置いてけぼりを食わされた格好だったが、最後の最後に彼が人生観を語りだすことでうまくまとまりがついた。椅子の上でうとうとしかけていると、彼の語気が強まったのを感じてはっと身を起こした。

「自分を変えるっていうのは本当に難しいよ」と叔父は言った。それから糸で引っ張り上げられたようにしゃっくりをし、喉を鳴らした。「苦しいし、難しい。現実をすべて受け入れなきゃならねえんだから。おれなんてとくに婿養子だろう？ それなりに世間の目は冷ややかだったね。若いころはどうしてこんなにしゃかりきになっただけで働いてるのにな。うまく事が運ばないんだって思ったよ。周りは楽しんで稼いでるのにどうして俺だけが、ってね。でもそうじゃないん

だ。周りは周りでつらいことばかりだし、自分より苦しい境遇に立たされてる人間なんざごまんといる。だから自分に甘えてたんだな、正直なところ。どんなに人前では謙遜してたって、根っこじゃ自分を過信してたんだ。虚栄心っていうのかな——そういうやつだ。自分がなにか特別だと思ってたんだ」

叔父は顔を横に向け、住宅街を等間隔に配された樹木に目をやった。それから手を伸ばしてビールに口をつけた。僕は彼の頬にある髭の剃りあとをまじまじと見つめていたのだけれど、まさにそのとき、彼の唇の端がぶるぶると震えているのに気がついた。

「圭ちゃんも——」と叔父はふたたび口を開きかけたが、嗚咽のようなものを押し留めようとしたためか、そこで言葉がいったん切れてしまった。けれど彼は、最後まで泣き出しそうになっている事実をひた隠しにした。「圭ちゃんもこれからつらい経験をいっぱいすると思うよ。それはエリートでも凡人でも変わりやしねえんだ。誰にでも苦痛は待ってるもんなのさ。結局はそれを受け入れるかどうかで人の一生は決まっちゃうんだろうな。こつこつと積み上げていくか、卑屈になるか、でさ。でもつらい思いをすればするほど、人には優しくなれる……それができないやつはただの馬鹿だ」ここまで話し終えると、ようやく彼はこちらに顔を向けた。涙はすっかり引いたみたいだった。「成功なんてそんなに魅力じゃねえんだ、実際。金もだよ。周りが金だ金だってうるせえから、みんな頭がどつかしちまってんのさ。本当に価値のあるものはもつと別のもんなんだ」

叔父の言葉のうちには、かつて夢見た大いなる目標の片鱗がうかがえた。それは人が免れることのできない失敗や挫折の果てに色あせ、今では別のかたちをとって彼を煩悶させているようだった。叔父が涙ぐんだのもそのせいではないかと思う。束の間、木造りのテラスに夜の静寂が降りた。人も鳥も獣もみな寝静まっていた。湿気を含んだ風が頬の辺りを撫でるように通りすぎ、木々をかすかにざわめかせた。

「愛ですか？」としばらくして僕は言った。

「愛？」叔父は僕がなんのことを言っているのかさっぱりわからないみたいだった。それからはずっとして思い当たり、夜半だということもすっかり忘れてからからと声を上げて笑った。「いやあ、ごめん。笑っちゃいけないんだ——笑っちゃいけない」

酔いのせいもあって、叔父の笑い声は頭の中をうつろに響き渡った。いつしよになって笑い飛ばしてしまえばよかったけれど、顔が真っ赤に火照ってそれどころではなかった。

「ごめんごめん」と改めて叔父は言った。それからわざわざ立ち上がって僕の肩を叩いた。「悪かったね。しかし圭ちゃんも大人になったな。成長したよ」

「別に深い意味があるとかじゃ——」

「いや、いいんだよ。それでいい」と叔父はきっぱり僕の逃げ口上をさえぎった。それから椅子にどっしりと腰を下ろした。「そうだよ、愛だよな。愛がなけりゃあ生きている意味なんかそれほどありやしないんだ。空っ箱の人生だ。振り返ったってそこにはなんにもありやしない」

叔父は思い入れたっぷりに首を振り、テーブルに肘をついて顔の前で手を組んだ。

「でもそれが当たり前だと思っちゃだめだ。そう思っているのは子供までだ。大人はもつと愛について、愛がどれほど価値あるものを常に確認して生きていかなくちゃならない。幸せとはそれを探すための才能でもあるんだからな」

僕は叔父の目を見た。彼は大きく息をついて膝に手を置き、立ち上がった。

「おいで。酔っ払って眠たくなっちまう前に例のものを出そう」
我々は簡単にテーブルの上を片付け、家の中に入った。カーテンはすべてではないにしろ閉ざされている。窓には迷路に似た樹木の影が落ち、月明かりと外灯の狭間で不分明な色合いの光をフロアリングに投げかけていた。僕は叔父のあとをついて廊下を歩き、階段

を上った。

「静かにな」と叔父は階段の途中で足を止め、こちらを振り返って囁いた。「起こすとうるせえからさ」

僕は黙って肯いた。

叔父は二階の角にある部屋に入り、僕を手招きで呼び寄せた。慎重にドアノブを閉め、叔父が部屋の電気を点けるまで僕は立ち尽くしていた。電気が点くと、それほど広い部屋ではないということがわかった。家具と呼べそうなものはほとんどなく、重ねられたダンボール箱や雑誌からどこか雑駁とした印象を受ける。

「今じゃ物置代わりだ」と叔父はこちらに背を向けたまま言った。「本当は子供部屋にしようと思ったんだけどな。ちよつとそこで待っててくれ」

叔父はゆっくりと辺りを見渡したあとで窓辺に歩み寄り、そこかなにかを手にして埃を払った。確かめるように月明かりに照らし、ふつと息を吹きかけた。

「これだ」と彼は僕にもよく見えるようにそれを翳した。「本当はどこかそれ相応の場所に飾つところと思ったんだけど、女房がいちいち縁起にうるさくてね。ここは駄目だ、あそこは駄目だってんで、結局そのままにしてあつたんだ」

それは変哲のない小瓶に見えた。僕は叔父からそれを受け取ると、目の前にまで掲げてじっくりと眺めた。近くで見ると、小瓶には鼠に齧られたようなぼろぼろのコルクで栓がしてあり、中に入っているのはどうやら腐った水だということがわかった。

「これがゆい一つの遺品ですか？」と僕は訊いた。

「そう。それ以外にはなにもなかった。他のものは全部元々おれか国の持ち物だった」

「水」と僕は小瓶に向かって心もとなくつぶやいた。

叔父が手の平を差し出したので、僕は元のように小瓶を彼に渡した。

「きつとどこか特別な場所の水だろう」と彼は小瓶に向かって言

った。中に生息する微生物を確かめようとしてもするかのようにぐつと顔を近づけ、そしてまた元のようにそれを僕に返した。「あの人の性格を考えるとどうにもそんな気がするよ」

第七章 「よく晴れた日の墓地にて、古い水、新しい水」

我々は上ったときと同じく、足音に注意して一階まで下りた。寝室に入る間際、叔父は僕の肩に手を置いておやすみの挨拶を言った。おやすみなさい、と僕は言った。それからふたたび階段を上がって部屋に入り、腕時計を外すとすぐさまベッドに体を横たえた。月が十分に明るい夜だった。

体は疲れていたが、なかなか眠れなかった。しばらくして、ベッドに入ってからどれくらい時間が経ったのだろうと腕時計に目をやったが、気が抜けていたせいだろう、力加減をあやまって時計を手の届かない場所に落としてしまった。このさいカーテンを閉め切ってしまうおうと立ち上がり、窓辺に寄ると、もううつすらと空が白み始めているのが見て取れた。僕はベッドに腰掛け、朝もやに例の小瓶を翳してみた。手の中でくるくると弄び、なまめかしい光をじつと眺めた。水は緑色に変色していて、とても飲んだりできる代物ではない。水が悪いのはいかな、とかつて本田さんは言った。これはいったいどの水なのだろう——やはりノモンハンでの水なのだろうか。ソ連に行く手を阻まれたあの河の水なのだろうか。僕はカーテンを閉めると小瓶を枕元の台に置き、薄いタオルケットを抱くように寝返りを打った。

死んでこそ、浮かぶ瀬もあれ、ノモンハン——その言葉のうちに、ただ計り知れぬほどの覚悟があつたと推測する他ないのだ。

次の日は昼前に暑さで目が覚めた。はっとして飛び起き、あわてて昨夜腕時計を落とした場所に体を屈めた。ちょうど時計を取り上げたそのとき、遠慮がちに部屋のドアがノックされた。

「圭ちゃん、起きてる？」その声は叔父だった。

僕はすぐに行くからと返事をして、荷物の中から手ごろな服を引っ張り出した。階下のリビングは溢れんばかりの光で満たされてい

た。四方からの留保なき太陽の輝きが、部屋のあらゆるものを活気づかせていた。絶え間ない鳥たちの歌、隣家からかすかに聞こえるテレビの音、静かなエンジン音やそれを取り巻く子供たちのはしゃぎ声。僕は思い切り息を吸い込んで、大きくのびをした。そのあとで階段を下り切り、ダイニングの方へ足を向けた。うまくコーヒーにありつけはしないかと考えたからだ。

「なにか食べる？」僕の足音を聞きつけて、数枚の皿を両手に奥さんがこちらに振り向いた。「残念ながら今はトーストしかできないんだけど」

「十分です。あとコーヒーをいただけたら」

奥さんと昨夕持ち出された料理の話に興じているとき、新聞を片手にゆったりとした足取りで叔父がダイニングに移ってきた。小鼻をひくひくと動かし、得心の行った顔つきでトーストを目にした。昨晩の酒がたたったのか、顔色はすくねない。煙草に火を点けると新聞を開き、椅子に座って自分の膝頭にもう片方の足を載せた。

「ここ、見てごらん」と叔父は僕の方に身を寄せ、新聞の片隅を指差した。顔と顔が近づくと、それに比例して煙草の臭いもきついものになった。「『生活保護、打ち切り相次ぐ』、『被保護者も明日は我が身と将来に不安』、『以降も高齢者世帯を中心に増加の見込み』」

それだけ読み上げると、叔父は元のように新聞を折りたたんでテーブルに放り、椅子の背にもたれた。

「まったく新聞つてのは朝から景気の悪い話ばかりだね」と彼は奥さんに向かって話しかけた。「今日もいい天気だな。暑くなりそうだ」

墓地までは十分もかからないとのことだった。僕はシャワーを浴び、髭を剃って半時間ばかりをリビングで叔父夫妻と共に過ごした。叔父がなにか果物が食べたいと言い出し、メロン丸々ひとつを三人で食べた。それで僕も昨夜の酔いをさっぱりどこかに追いやってし

まうことができた。そうこうするうちに日差しもますます強くなってきたので、そろそろ行こうかと叔父が立ち上がった。彼はつばのついた茶色の帽子を手にとつて、それを深くかぶつた。

「二人とも暑さには気をつけてね」と奥さんが言った。

「おれの知り合いでこんなやつがいてさ」と叔父は思いついたように突然両手を広げて言った。「そいつは普段いつも帽子をかぶつてたんだけど、三十のときに中華料理屋のコックに転職したんだ。さてなんでだと思う?」

僕と奥さんは顔を見合わせた。

「どうしたの、いきなり」

「いいから答えて」

僕と奥さんはわからないと首を振つた。

「じゃあ答え合わせ」叔父は耐えかねたように笑い声をもらし、ひどく興奮した顔つきで言った。「訊いたんだよ、そいつにさ、なんでわざわざ月給を下げてまでそんな職につくのかつて。そしたらね……」仕事中也帽子で禿げを隠せるからだつて!」

三人がそろつてふきだし、いつときのあいだ家の中が笑い声で満たされた。それは賑やかな午後の始まりにぴったりのものだった。夏が一瞬のうちに盛りを見せ、いままさにピークに達したことを僕は感じ取つた。

林に囲まれた墓地では蝉の鳴き声がまさしく地表に降り注いでいた。外はからりとした陽気で空は低く、長く続く石畳の先は陽炎で歪んでいた。そばに中学校があり、校庭からは金属バットでボールを打つ音や語尾の伸ばされた掛け声が間断なく聴こえてきた。少しして叔父が車の方を振り返り、迷うように立ち止まってから頭を仰け反らせて舌打ちした。

「花を買ってくるのをすっかり忘れてた」彼はばつの悪そうな顔で帽子をかぶりなおし、言いわけするようにひとりごちた。「どうにもおれはひとつ抜けてんだ。まあまたお盆に来るからな……その

ときにでも……」

本田さんの墓は端から三番目の列にあった。僕らはそばに立てかけてあったブラシで墓石を擦って洗い、落ちているごみを手で拾った。叔父が香炉に線香を焚き、僕がそのあとに続いた。細い煙がゆつくりと二本立ち昇り、難解な図形を描いて木々のひんやりとした暗がりの中に吸い込まれていった。供え物の日本酒を墓石の段に置き、ひしゃくで墓に水をかけたあと、しばらく叔父と僕はその場 hands を合わせて座り込んだ。

「本田さん」と叔父は目をつむったまま墓石に語りかけた。「圭ちゃん来たよ。おれの息子だ。こんなに大人になった」

僕は黙っていた。それからポケットに手を入れ、中にあるものの感触を確かめた。花火をしたときだろう、腕や足のいたるところが蚊に刺されて赤く腫れていた。

「さて、行くか」と叔父は自分の両膝を軽く叩き、立ち上がった。「まあこんなもんだろう。あんまり邪魔しちゃどやされちまうからな」

「ちよつと待っててもらえますか？」

「なんだ、どうかしたの？」

僕は立ち上がって、ポケットから昨日の小瓶を取り出した。

「これです」

叔父はうまく飲み込めない顔で小瓶と僕を代わる代わる見た。僕の小瓶のコルクを力ずくで引き抜き、中の水を一滴残らず地面に零した。叔父が驚きを含んだ短い声を上げ、あわててこちらを向いて目をしばたかせた。僕は走って井戸の水をひしゃくですくいに行き、小瓶に注いで墓石まで駆け戻った。それから墓石の前に小瓶を置いた。

「バチが当たったりしねえかな」と叔父は不安げに言った。

思い切ったことをしたせいで、僕の瞳は判断力を欠いた人のようになっていた。心臓がときどきと音を立て、顔が真っ赤に火照った。「水が悪いのはよくないんです」と僕はぎこちない感じで言った。

「そうか」と叔父は笑みを浮かべ、僕の体を支えるように背中に手を置いた。「じゃあまた来年も新しい水に変えてやらなきゃな」僕は従順な子供のするような感じで肯いた。

第七章 「口論、互いに譲れぬもの、まっただき愛」

僕らはそれから行きがけに見た個人経営のレストランで焦げたハンバーガーを食べ、なんとはなしに湖に寄り、釣り人たちの釣果に順をつけてから家に帰った。腕時計は一時近くを差していた。部屋で帰り支度を整えていると、ふたたび叔父がドアをノックし、「後生だから将棋をもうひと指しして欲しい」とせがんだ。僕は手に持っていた縞のシャツをベッドに放り投げ、叔父と一階に降りた。僕はそのときなんとも頭が冴え渡っていたから、結局勝負が着くのに十五分とかからなかったのではないかと思う。しかし三度も続けざまに勝ってしまうと、さすがにばつの悪い気分になった。叔父は駒のせいではないかとばかりに自陣の王将を裏返し、それからひとおもいに深いため息をついた。

「来年までには腕を磨いておこう」と彼は苦笑いを浮かべて言った。

二時になると奥さんが習い事から帰ってきて、僕らに粘土でない本物のフルーツ・パフェを振舞ってくれた。テーブルを囲んで次の予定について和気藹々と話し合っていたのだが、気づくとリビングにあるテレビがそろそろ買い替えどきだという話になり、生クリームをすべて胃のおさめるころになると、今度は叔父がいつ禁煙を始めるのかという永遠の議題に移っていた。それは僕が帰り支度をしようと席を立つまでしぶとく続けられた。

「だって本当に耐えられないんだもの」今や彼女の声はしつかりと熱を帯び、刻一刻と真剣味を増し始めていた。「服にだって臭いがつくし、うちの中は常に煙でいっぱい。ほら、見て！」奥さんは突然部屋のあちこちを指差して叫んだ。「そこも、そこも、あつちまで全部！ どこも真っ黄っ黄！」

『真っ黄っ黄！』という部分に彼女は特別念を押した。彼女の思惑に僕の存在が利用されていることは明らかだったけれど、今さら

どうしようもない。

「わかつてる。わかつてるよ」と叔父は言った。声の調子から、なんとか理性的になろうと感情を押し留めているのがわかる。

「全然わかつてない」ふいに奥さんは肩の力を抜き、かえって物悲しい調子で言った。しかし目は元のままだ。相手の出方によって彼女の声は高まったり弱まったりした。「なにがわかつてるの？わたしはあなたに煙草をやめてもらいたいって言ってるの——ずっとそう言ってるの」

張り詰めた沈黙が場に下りた。二人はどちらとも相手から目を逸らさなかった。

叔父はテーブルに手をついて立ち上がりかけた。「もう今はいいだろう。圭ちゃんだって時間がないんだから——」

「逃げないで」ときつい声で彼女は言った。「ねえ、ここではつきり言つて——ちゃんと言つて欲しいの、いつ煙草をやめてくれるのか」

奥さんはここで叔父がただ一言、煙草をやめるとはつきり明言することを望んでいた。そしてそれ以外の逃げ口上では絶対に譲るまいと決め込んでいた。

「やめる。もう吸わないよ」と一呼吸あつてから叔父は言った。

「さ、支度しよう。喧嘩はおしまい」

なおも奥さんは目を逸らさずに叔父の方をじつと見据えていた。

「本当に？」

「ああ」

「嘘じゃなくてね？」

叔父は背を向けたまま肯いた。

三時半を回ったころ、二階の窓から叔父が車を玄関の前につけるのが見えた。階段を下りると足音を聴きつけて奥さんが僕の名を呼んだ。くぐもった声で「ちょっと待ってね、すぐ行くから」と。そのあとでスリッパが板張りの床を打つぱたという音が心地よく

耳に入ってきた。

「さつきはごめんね」と奥さんは笑顔で言った。「これ、圭ちゃんの部屋のどこでもいいから飾ってやってよ。犬のぬいぐるみ」

「お手製ですか」

彼女は肯き、いちど玄関を振り向いてきつかけを演出した。

「あの人のことなら心配しなくていいから。ときどきはあんなっちゃうの。どうしても」

「子供じゃないから知ってますよ」

「もう大人？」

僕は笑って肯いた。「でももう半分は子供です」

僕は奥さんに礼を言い、ぬいぐるみをバックパックに押しこんだ。

帰りも同じ道を通った。風のない日だったが、それでも林道は涼しげに映じた。舗装された道に入るまで、ひとりも人間を見かけなかった。スーパーマーケットのガラス窓には特売のポスターが一面に貼られ、買い物かごを持った人で賑わっていた。叔父は車を運転しながらなにか物思いに耽っているようだった。そしてその原因が先ほどの口論にあることは、当然ながら僕にもわかっていた。

「なにか買っついこうか」彼は人だかりを目に留めて言い、乾いた咳払いを交えた。「新幹線を待ってるあいだ暑いだろうから、なにかジュースでも」

僕は首を振った。駅で買うからかわわない、と。

「夏だし、少し髪を切った方がいいかもな」と彼は僕を一瞥したあとでかぶっていた帽子をとり、自身の髪を撫でつけた。「おれもそろそろ刈りどきだ」それからいかにも言いにくそうに、うわずった声で続けた。「……女房はなにか、言ってた？」

「心配しなくていいって言ってみましたけど」

「そうか」

「本当に禁煙するんですか？」

しばらくのあいだ答えはなかったが、やがて彼は決断するように

しっかりと肯いた。

「全面的におれが悪いんだ。あの子にはいつも迷惑かけてる」

僕は運転席に身を乗り出して、祝福するようにクラクションを鳴らしてやりたい衝動に駆られた。なんともいえず温かい感情が胸をこみあげた。あらゆる不吉な世迷い言がいちどきに払拭されたかのような気分だった。まったく愛の力が僕にさえしほしの幸福を与えたのである。

第七章 「旅の終わりを示すもの、長いお別れ」

駅についてからも僕はなかなか車を降りなかった。ちょうど叔父の少年時代の話題が持ち出され、話に華が咲いていたからだ。彼は小学校のころと中学校のころに、二度ばかり長野へ訪れたことがあったらしい。一度目は修学旅行かなにかで、二度目は家出だった。十四歳の夏、彼は家族と友人たちの概ねに絶望し、ほとんど一文無しで家を出た。それからとにかく東京を離れたいという理由で無賃乗車を繰り返し、埼玉と群馬の県境でしばらく立ち往生した。少年の彼にとって、ヒッチハイクをするのにはあまりに勇気がいったのだ。排気ガスと車の群れを眺めること半時間あまり、もう引き返してしまおうかという段になって、幸運にも一台のトラックが積荷を降ろそうと彼のすぐ脇に停車した。運転手に声をかけたとき、少年にはもはや自分がなにをやっているのかわからなくなってさえたが、助手席に腰を下ろすことが許されると、自分がいま過去の人生を後に残して新しく生まれ変わるのだという気になった。そのようにして国道十八号を伝い、たった半日のうちに長野に辿りついた。運転手に別れを言い、線路沿いを歩いて街のいちばん栄えた場所に出了とき、彼の心は真の満足を得た。それから約二時間ばかり意味もなく人々の顔を眺め回し、午後中ずっと足がぼろぼろになるまで街中を探索した。そこには今とまったく別の人生があるかのように少年の瞳には映じた。不安はあったが、かろうじてあてはあった。自分の外見から年齢を偽ることは難題ではないし、農場かなにかを見つければひとりくらい雇ってくれるだろうという、いかに子供らしい世間知らずなあてである。しかしひとまず東京にいる家族の下を離れられたことで気抜けしてしまったのだろう、見知らぬ土地の散策半分、ねぐらを探そうと夜の公園に入ったところで、背後から自転車に乗った警官に声をかけられた。少年はジョギングだと言いき張ったが、もちろん嘘だと見破られた。

「そのころはまだわりかし真面目だったからさ、そりゃ縮み上がったね。頭の中で『逃げる、逃げるぞ、行くぞ行くぞ』ってずっと考えてたんだけど、全然足が動かねえんだ。でも親父が迎えに来たときはちよつとほつとしたっけな。いや、そのときは怒られなかった。たぶん向こうもほつとしてたんだろう。あとからことあるたびにぐちぐち言ってきたけどな。それでまたおれは家出しちゃうんだ。その繰り返し」

彼は覚えているかぎりで七度家出をしたが、それ以降長野には近寄りもしなかった。もっと様々な土地を目にしておきたいという好奇心もあったのだろう。しかしそれでも、喫茶店を経営したいと考えたとき、彼は迷うことなく長野の地を選んだ。店を出す際には義父がいくらか足りない分を都合してくれた。義父は始めのうちこそ叔父と奥さんの結婚には反対だったのだが、なんにでもあきらめ癖のついた人なのか、一度結婚を承諾してしまうと、それ以降も実に様々な点でしぶしぶとはあるが助力してくれた。二人の良き理解者とまではいかなかったが、金力の乏しい彼らにとってはありがたい存在だった。

新築の喫茶店が完成するまでの十ヶ月間、彼はやきもきしながら日を送った。というのも二人には無人島からあてずっぽうにボートを漕ぎ出したようなぎりぎりの予算しかなかったし、かといって半年間やってみてだめならすぐにやめられるというようなものでもなかったからだ。あまりに他者の力を借りすぎていたのである。果たして店の支柱が一本増えることに、彼の不安も確かな骨子を得た。建築が始まってすぐは心を震わせて足しげく通ったが、その回数も徐々にではあるが減っていった。あとは看板を取り付けるだけですよ、という棟梁からの電話があったとき、彼は正直なところぎくりとした。自らを前にも後ろにも進むことのできない人のように感じて息苦しくなったほどだ。しかし長野に降り立ち、額に手でひさしを作って自分の店の看板を見上げたとき、彼はいつかのような驚きと満足を得た。それは旅の終わりを示すもののように見えた。そし

てそれは決して間違いではなかった。そこが彼の終着地点だった――
―そのようにして叔父の家出は完結を迎えたわけである。

「もうここから動く気はないよ。死ぬまでな。あいつもそれには賛成してくれてる。これから先なにがあるかわかりやしねえけど、なんとか踏ん張ってくつもりだ。ここで駄目だったら他のどこに行つたつて駄目さ。どうせなら死ぬんならここと決めた場所で死にたいからね」

話が終わったあと、長い沈黙があつた。叔父はなにも言わずに僕の肩に腕を回し、「また来年だな」とつぶやいた。それからもう一度ばかり、深い思いを込めて「また来年会おう」と肩を叩いた。

だがたとえそれが明日であろうと一年後であろうと、別れというものはいつだつて胸に込み上げるなにかがあつた。僕は車を降りて運転席側のドアを開けた。叔父は意味を解して車を降りた。僕としてはもう少しきちんと別れを言っておきたかつたのだ。

「どうもありがとうございました。さようなら」と僕は言った。

叔父は肯いた。

「じゃあこれな」と言つて、叔父は車の日よけから一枚の封筒を取り出し、僕の手に握らせた。「くれぐれも新幹線に乗ってから開けてくれよ」

「本当にご迷惑をおかけしました」と僕はお辞儀した。

「いいよ。やめてくれよ」と叔父は笑つた。「こっちは面倒だなんて思つてやしないさ。むしろ圭ちゃんに感謝してるくらいなんだぜ。久しぶりに本田さんの供養もできたしな」

「また来年、お線香をあげに来ます」

叔父は肯き、微笑んだ。

「水もな」と彼は言つた。それから僕の肩を唐突にぱしんと叩き、親指を立てた。「じゃあ彼女としつかりやれよ」

僕は肯いて、叔父と握手を交わした。

「さよなら。本当にありがとうございました」

車を見送ったあと、僕は新幹線の時刻を確認し、切符を買ってプラットホームのベンチに座った。夏の盛りに呼応するように、人々もまた活気づいていた。蝉たちが生を謳歌し、他に負けじと声を張り上げている。鼻先をかすめる打ち水の匂いがあたりを気持ちよく漂い、何重にもかさなる人々の話し声の上をアナウンスが響き渡っている。そのような喧騒の中で僕は目をつむり、自身が目にした長野の夏を強く記憶に焼きつけようと努めた。絶え間なく変動する価値観の中に、歴とした座標軸を捉えようとしてもするかのように。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7550b/>

夏目漱石の憂鬱

2010年10月9日17時57分発行